公益財団法人 日本ハンドボール協会編　平成28年9月1日発行(毎月1回1日発行)　通巻561号

ハンドボール

8・9 号
AUG. SEP. 2016 No.561

特集
日韓定期戦2016
第23回世界学生選手権
第4回U-22東アジア選手権
第20回女子ジュニア世界選手権



[表紙写真] 日韓定期戦2016、女子MVPの塩田沙代選手(左)、男子MVPの信太弘樹選手(右)

公益財団法人 日本ハンドボール協会
http://www.handball.or.jp/

ANA Inspiration of JAPAN

A STAR ALLIANCE MEMBER

www.ana.co.jp

30th Anniversary International Service

これからも、5つ星の空で。

空を旅するすべてのお客さまに、ご満足いただける快適な時間と空間を。
今日もANAは5つ星のサービスで、みなさまを目的地にご案内しています。



英国のエアライン格付機関SKYTRAX社が主宰するエアライン・スターランキングで
4年連続、世界最高評価「5STAR」を獲得。ANAは日本で唯一の5スターエアラインです。

我がハンドボール！
子どもたちの未来に向けて



公益財団法人 日本ハンドボール協会 副会長 兼 専務理事　**蒲生 晴明**

本年6月26日に開催されました当協会評議員会・臨時理事会にて、副会長兼専務理事を拝命いたしましたことをご報告申し上げます。渡辺会長のもと役職員の皆さんと一緒にハンドボール発展のために専心致しますので、ご指導、ご鞭撻をお願いします。

さて、この原稿を書いております本日、リオデジャネイロオリンピックの開会式が盛大に行われております。日本選手団の堂々たる入場行進を目の当たりにして、我がハンドボール競技日本代表チームが出場していない現実に淋しくも悔しい思いで胸が痛みます。ご存知のとおり、日本のハンドボールは男子が1988年ソウル五輪、女子が1976年モントリオール五輪を最後にオリンピックに出場しておりません。しかし、2020年東京オリンピックでは、開催国として男女とも出場することが約束されています。私たちはこの好機に、日本のハンドボールを再び世界の舞台で活躍する競技へと飛躍させるべき使命を帯びていると感じています。

半世紀前の東京オリンピックは、日本のスポーツ界にとって大きな歴史的転換点になりました。当時、東京・府中市の野球好きな小学校5年生だった私は、マラソンの折り返し地点近くで優勝したアベベ選手の勇姿を見て熱い感動を覚えました。体操の遠藤幸雄選手、日本女子バレーボールチームの活躍、柔道・神永選手とヘーシンク選手の熱戦など、子供心にスポーツの素晴らしさを実感したのです。私が本格的にハンドボール競技を始めたのは中央大学付属高校に入学してからのことですが、あの時の東京五輪の感動がなければ、これほどスポーツに、そしてハンドボールに青春を賭けることもなかったかもしれません。また、素晴らしい指導者に巡り合ったことで、ハンドボールに打ち込み、世界の舞台で競技することが実現したのです。

私はその後、プレーヤーとしても指導者としても、また協会のメンバーとしても、長年にわたってハンドボールに関わることになりますが、その原点は東京五輪であり、高校のハンドボール部との出会いであり、一言で言い表せば「感動」であったと思います。

2020年東京オリンピックまで残された時間はあとわずか4年間しかありません。その道のりの中、女子日本代表チームが、アジア選手権で2017年の世界選手権出場権獲得にチャレンジ。男子日本代表チームは、既に2017年世界選手権に出場を決めています。ともに活躍が期待されるところです。

さらに、1997年男子世界選手権を開催した熊本で、2019年に女子世界選手権を開催します。日本協会は熊本の関係者の皆様とともにその成功に向けて万全の準備に当たります。

東京オリンピックへの過程で、一つ一つの関門をクリアすることによって、日本のハンドボールは底力と体力、自信をつけてゆくと確信しています。

日本のスポーツ界は、2020年まで国を挙げての強化に取り組み、ハンドボール競技も満足できる結果を出せるよう全力で取り組みます。しかし、私たちにとって、来るべき東京五輪はゴールではなく一つの通過点です。本当のゴールは、2020年以降のオリンピック、世界選手権に常時出場し、メダルを獲得することだと考えています。私にはいつも、子どもたちの顔が目に浮かびます。夢中で大好きなハンドボールに打ち込む子どもたち、彼らの憧れの選手たちが世界の舞台で大活躍する、子どもたちは精一杯の声援を送り、自分たちも世界を目指してゆく。そんな光景です。

現在のハンドボールを取り巻く環境は大変厳しいものがあります。そして、メダルに向けて課題も山積しています。しかし、諸先輩が築き上げてこられたハンドボールの歴史と伝統をさらに進化させることが我々の使命です。そのために、渡辺会長のもと役員・事務局・関係者が大目標実現に一丸となって取組みたいと思います。「夢は見るものではなく、実現するものである。」と思っています。

日韓定期戦 2016

2016 JAPAN KOREA HANDBALL SUPER MATCH

開催地：韓国・ソウル
会場名：SK オリンピックハンドボール体育館
日　時：2016 年 6 月 25 日(土)

2 点共　写真提供：スポーツイベント社

参加報告　2016 年日韓定期戦を終えて

団長　田口　隆

本年度の日韓定期戦は、6 月 25 日（土）に韓国・ソウルの SK スポーツホールにて開催されました。私は団長という役割と強化本部長という立場で男女代表チームに帯同させていただきました。

男子代表チームは、1 月の男子アジア選手権で指揮を執ったアントニオ カルロス オルテガ ペレス氏（スペイン）と 2017 年 1 月の男子世界選手権（フランス）までの契約を再度締結し、6 月 2 日から強化合宿を実施して日韓戦に臨みました。

女子代表チームは、ウルリック キルケリー氏（デンマーク）と 2020 年東京オリンピック終了までの契約を締結し、2019 年熊本世界選手権・2020 年東京オリンピックを目指して 6 月 15 日から強化合宿を実施して日韓戦に臨みました。

チーム編成は、男子代表チームは 1 月の男子アジア選手権で第 3 位になったメンバーを中心に志水・小塩・山田を加えての編成となりました。女子代表チームはリオ世界最終予選のメンバー永田・塩田・横嶋彩・池原・原・川村・白石を中心に 2015 年ユニバーシアード代表に加え、ジュニア代表選手での編成となりました。同時期に世界学生選手権が開催されたこともあり、世界学生選手権出場条件をクリアしている選手については実戦経験を多く積める機会であると考え、世界学生代表メンバーとして選出しました。

男女代表チームは試合前日の 24 日（金）に韓国・ソウルへと移動しました。現地到着後、コンディション調整を行い、翌日の試合に備えました。私は団長の職務として夕刻に実施されたテクニカルミーティングに参加しました。韓国ハンドボール協会の進行のもと、テクニカルデレゲートとして国際ハンドボール連盟より派遣された MONIKA HAGEN 氏とレフェリーとして招聘された PETER KRISTIC 氏・NENAD WUBIC 氏（スロベニア）から試合進行上の注意と新ルールについて説明がありました。

テクニカルミーティングは英語と韓国語で進行され、日本チームに対しては通訳を介して韓国語から日本語に通訳していただく形でした。今回の代表スタッフは、語学力もあり通訳なしでも理解する事ができ、国際連盟・韓国協会のメンバーともコミュニケーションが取れていました。大会等でチーム付き通訳には、ハンドボール競技に関しての知識がない場合があります。その場合、説明内容が上手く伝わらないケースがあったように記憶しています。いつもながらですが、今回も世界のハンドボールの仲間と円滑なコミュニケーションを図り、あらゆることで日本チームの優位性を維持するためには、ある程度の語学力は必須であるということを改めて感じた次第でした。現場スタッフの方々にはハンドボールの専門的な知識を磨くことに加えて、コミュニケーション能力を磨くべく語学力もさらに磨いていただきたいと思いました。また、大会運営に関してもテクニカルデレゲート及びレフェリーの国際連盟からの招聘についても、2019 年・2020 年を考えた時に日本国内での国際大会の開催時には、日本という国・日本のハンドボールを世界の仲間に知っていただく絶好の機会と捉え、積極的に招聘していかなくてはならないと強く感じました。来年度の日韓定期戦は日本開催となるので、この辺りについても積極的に活動していきたいと思います。

上記のような世界の仲間を日本のハンドボール界に取り込んでいく先には、代表チームのさらなる強化があります。今回の日韓定期戦では、男子代表チームは後半の勝負所での失速があり、課題を残しました。来年 1 月の世界選手権では強豪国相手にもスキのないチームへと変貌しなくてはなりません。女子においても、前半でのノーマークシュートの精度が悪かった点、後半のスタミナ切れ等課題が山積みですが、12 月のアジア選手権（世界選手権予選）も迫っています。一つ一つ課題を明確にして、その課題克服に向けて取り組んでいかなくてはなりません。試合後、男女両チームともスタッフと選手でミーティングを実施して、問題の顕在化に努めている姿がありました。当然ながら誰一人満足している顔を見せる者はいませんでした。このような姿勢が将来の日本のハンドボールを変えるものと信じたいと思います。

最後に、日韓定期戦に際して選手を派遣いただきました所属チーム関係者の皆様、現地日本国大使館から応援に来ていただいた園田様・篠田様をはじめ会場で応援いただきました皆様、インターネット中継で応援いただきました皆様、その他多くの皆様方のご支援・ご配慮・ご声援に感謝申し上げ、報告とさせていただきます。

男子 日本 24（13－14, 11－15）29 韓国
女子 日本 17（10－16, 7－21）37 韓国

選手団名簿

男子

役職	名前	所属
強化本部長	田口 隆	（公財）日本ハンドボール協会
監督	Antonio Carlos Ortega	（公財）日本ハンドボール協会
コーチ	Nemes Roland	（公財）日本ハンドボール協会 筑波大学
コーチ	吉村 晃	（公財）日本ハンドボール協会 豊田合成
GK コーチ	北林 健治	（公財）日本ハンドボール協会 都城工業高校
トレーナー	寺尾 邦仁	（公財）日本ハンドボール協会 ながい接骨院
分析	永野 翔太	（公財）日本ハンドボール協会 筑波大学
統括	田中 茂	（公財）日本ハンドボール協会

	名前	所属	出身校
1	信太 弘樹	大崎電気	日本体育大学
2	植垣 健人	大崎電気	大阪体育大学
3	志水 孝行	湧永製薬	大阪体育大学
4	元木 博紀	大崎電気	日本体育大学
5	小室 大地	大崎電気	日本体育大学
6	高智 海吏	トヨタ車体	大阪体育大学
7	甲斐 昭人	トヨタ車体	日本体育大学
8	笠原 謙哉	トヨタ車体	東海大学
9	渡部 仁	トヨタ車体	日本大学
10	久保 侑生	大同特殊鋼	筑波大学
11	加藤 嵩士	大同特殊鋼	愛知大学
12	東江 雄斗	大同特殊鋼	早稲田大学
13	成田 幸平	湧永製薬	大阪体育大学
14	銘苅 淳	Mezokovesdi KC(HUN)	筑波大学
15	山田 隼也	トヨタ自動車東日本	早稲田大学
16	小塩 豪紀	豊田合成	中京大学

女子

役職	名前	所属
強化本部長	田口 隆	（公財）日本ハンドボール協会
統括	栗山 雅倫	（公財）日本ハンドボール協会 東海大学
監督	ウルリック キルケリー	（公財）日本ハンドボール協会
GK コーチ	北野 香代	（公財）日本ハンドボール協会 六角橋中学校
トレーナー	高野内 俊也	（公財）日本ハンドボール協会 （一財）日本予防医学協会
分析	嘉数 陽介	（公財）日本ハンドボール協会
通訳	高橋 豊樹	（公財）日本ハンドボール協会

	名前	所属	出身校
1	塩田 沙代	北國銀行	高松商業高校
2	永田 しおり	オムロン	福岡女子商業高校
3	横嶋 彩	北國銀行	環太平洋大学
4	池原 綾香	三重バイオレットアイリス	日本体育大学
5	原 希美	三重バイオレットアイリス	日本体育大学
6	安倍 千夏	ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング	筑波大学
7	網谷 涼子	ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング	筑波大学
8	川村 杏奈	ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング	東海大学
9	田中 茜	飛騨高山ブラックブルズ岐阜	東京女子体育大学
10	白石 さと	オムロン	東京女子体育大学
11	永田 美香	北國銀行	四天王寺高校
12	藤田 明日香	ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング	四天王寺高校
13	河原畑 祐子	筑波大学	佼成女子高校
14	青 麗子	筑波大学	白梅学園高校
15	渡部 真綾	東海大学	小松市立高校
16	勝連 智恵	オムロン	宣真高校

日韓定期戦報告

男子代表統括　田中　茂

去る6月24日に韓国・ソウル市SKホールで2016年日韓定期戦が開催されました。日本男子代表は、1月に行われた第17回男子アジア選手権にて、カタール、バーレーンに次いで3位となり、アジア代表として2017年1月にフランスで開催されます男子世界選手権の出場権を得ています。このアジア選手権予選グループ初戦の相手がライバル・韓国でした。新生・オルテガジャパンはこの韓国戦に26年ぶりに勝利し、勝った勢いを維持したままアジア選手権を勝ち抜くことができました。逆に韓国は、日本に負けた以降も最後まで調子が上がることなく、6位という成績で大会を終了しました。

韓国は、ホーム開催の日韓定期戦で日本に連敗できないと、ベテラン選手をチームに再合流させ、4月から合宿を行い、この大会に臨みました。一方、日本は、6月2日よりカルロス・オルテガ監督のもと、代表合宿に入り、日韓定期戦に臨みました。その内容についてご報告申し上げます。

1. 代表合宿（6月2日～23日）での取り組みについて

はじめに、この合宿から全ては世界選手権に向けて取り組んでいくことの確認を行った上で、前回のアジア選手権での試合内容分析結果を元に、今後日本が強化し、取り組んでいかなければならない重点項目についてトレーニングを行ってきました。

- 6-0DFの精度をさらに上げること。待つのではなく攻めていくこと。
- 新しい5-1DFシステムを取り入れ、その精度を上げること。
- 7人攻撃の確立（戦術理解）
- OF戦術のレベルアップ（スピード・タイミング・狙い）



写真提供・スポーツイベント社

上記は、日韓定期戦に向けた特別な対策ではなく、世界選手権に向けた重点強化項目としてトレーニングを行ってきました。

2. 日韓定期戦に向けたメンバー構成

アジア選手権に参加したメンバーから、木村、土井、徳田が不参加となったため、新たな選手として志水、山田、小塩を招集、日韓定期戦に臨みました。

3. 日韓定期戦を終えて

試合内容については戦評等でご確認頂くこととして、代表合宿以降に取り組んできた内容とその結果について記述致します。

まず、6-0DFシステムについては、試合の中盤からCBに本来はPVのパクが位置したことで、PVを警戒し中央からミドルを打ち込まれるシーンが多く、得点を許してしまいました。重点的にトレーニングを行ってきた「攻めていくDF」でしたが、選手の思いっ切りが欠けていたり、全体のタイミングがずれていたりで、今後の課題として残りました。ただ、日本が新たに取り組んできた5-1DFへ変更し、韓国の攻撃に対応する戦術は今回行いませんでした。

7人攻撃は、どれだけ選手が戦術を理解し、今後の実戦で日本の武器としてどの程度通用するかをトライし、感触をしっかりとつかむことができました。

OF戦術のレベルアップについても、戦術的には攻撃が成立、成功確率の高いポジションからのシュートで得点も挙げているが、最後のノーマークや決めなければいけない場面でのミドル等の精度が、まだまだ満足のいく結果とはなっていませんでした。このため、後半に得点が取れなかったのが敗因となってしまいました。

4. 今後の取り組みについて

日韓定期戦試合終了後のミーテンングでは、試合での敗因を徹底して分析し、個人のシュート等に関しては、テクニックも必要であるが、力強く打ち込むことが課題として挙げられました。今後の取り組みとして、カタール遠征、第三次国内強化合宿、ヒロシマ国際、大分親善試合、欧州遠征と、休む間も無く世界選手権に向けた強化が進んでいきます。今回見つかった課題、また新しい戦術への取り組み等、世界選手権に向けてやるべきことはたくさんありますが、選手のモチベーションの高さを今後も維持していき、チーム一丸となって強化していきたいと思います。

最後になりましたが、代表合宿に常にご協力頂いております選手所属チーム、並びに協会関係者の皆様にこの場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。

日韓定期戦を終えて

男子代表キャプテン　甲斐 昭人

今回の日韓定期戦に向けては、1月に行われたアジア選手権の戦い方をベースに、来年の世界選手権を見据えた新しい戦術も試しました。結果は24対29で敗れましたが、新しく加わったメンバーも含めて、アウェイでの貴重な経験を積むことができました。

韓国のメンバーがアジア選手権の時からリオ五輪予選の時のベテランメンバーを呼び戻して4月から合宿を組んでいたこと、アジア選手権で日本に26年ぶりに敗戦し、連敗はできないというプレッシャーの中で、会場を埋めるほどの観客動員をしてこの試合に強い気持ちを持っていたことも伺い知れました。

そういう現状を鑑み、韓国の雰囲気に飲まれてしまった感もあり、アジア選手権の時とは違うチームのようなパフォーマンスになってしまいました。しかしながら、敗戦したその日のうちに試合の映像を全員で確認し、できたこと、できなかったことを認識したことで、このチームはより良くなっていくという確信を持つこともできました。

課題はまだまだありますが、個人として、チームとして、より改善し向上させていくこと、そして結果を出すことが代表チームに求められていますので、引き続き可能性を信じて取り組んでいきたいと思います。

最後になりましたが、平素より代表チームを応援し、支えて下さっている皆様にお礼申し上げるとともに、日本中のハンドボーラーが憧れる集団、魅力的なチームになれるよう精進してまいりますので、今後も代表チームの活動に注目頂き、応援して下されば幸いです。

男子戦評　日本　24（13－14・11－15）29　韓国



日本のスローオフで試合開始。日本は、左WGに初代表の小塩、左BP信太、センター東江、右BP高智、右WG元木、PV加藤、GK甲斐でこの試合に臨む。韓国、日本共に6-0DFで試合はスタート。韓国はいきなり№7がセンターから強烈なミドルで先制するが、日本も次の攻撃でボールをサイドまで繋いで、小塩が代表初ゴールを決めてすぐに追いつく。日本は立ち上がりからDFを固め、韓国の多彩な攻めや1対1に対して有効な牽制で相手のミスを誘い、元木が速攻で決める。韓国も同様に二次速攻から得点を挙げるが、日本はセットOFで高智が強烈なミドルシュートを決めるなど、日本が先行する形で試合は進む。その後日本は、ノーマークシュートの場面を作るが韓国GKに阻まれ、そのボールを日本のDFが整う前に速攻を仕掛けられてしまい、連続得点を許してしまう。開始10分には5対6と韓国に逆転を許す。日本も高智のミドルシュートで追いつくも、次の攻撃で高智が負傷退場となるが、代わって入った山田が強烈なミドルシュートを韓国ゴールに叩き込む。これで日本がリズムに乗るかと思われたが、韓国GKがことごとくセーブしてお互いに試合の主導権を譲らない展開となる。その後、銘苅の退場を機に韓国が連続得点を取り、点差が3点差に広がる。日本はここでメンバーを変更、センター植垣、右BPに元木をポジションチェンジし、右WGに渡部、PVに小室を投入して挽回を狙う。DFで粘った日本は、韓国のミスを速攻につなげ元木、成田の連続速攻、植垣のミドルシュートで同点に追いつく。前半終了間際で韓国は、日本の2名が連続退場を機に7mTを最後は決め、14対13と韓国1点リード折り返す。





後半開始から4人でのDFとなった日本に対し、韓国は確実に得点を決め、守ってはGKの再三の好セーブから速攻を仕掛け、後半10分には14対19の5点差となる。日本はここで流れを変えるために7人攻撃を仕掛け、信太がミドルシュートを打ち込むも、一旦傾いた流れを変えることができず、ポスト、センターからのミドルシュートで連続得点を奪われ、18対26と8点差がつく。日本も再び7人攻撃で攻め、得点は奪うものの、韓国の攻撃を止めることができず得点差が縮まらない。日本は終盤に連続得点を奪うが追いつくことはできず、24対29で試合終了となる。



この試合、前半終盤から後半立ち上がりのプレーと、韓国GKに勝負どころでことごとくノーマークシュートを阻止されたことが最後まで響いた試合内容だった。

【個人得点】信太5点、元木4点、植垣・銘苅3点、高智・小塩・成田2点、加藤・山田・東江1点

4点共　写真提供：スポーツイベント社

第23回 世界学生選手権

23rd World University Handball Championship

大会期間：2016年6月26日(日)－7月3日(日)
開催都市：スペイン・マラガ

最終順位

男子	女子
優勝：ルーマニア	優勝：スペイン
2位：韓国	2位：ルーマニア
3位：スペイン	3位：ポーランド
4位：日本	4位：ロシア
5位：エジプト	**5位：日本**
6位：ロシア	6位：チェコ
7位：ポルトガル	7位：インド
8位：チャイニーズタイペイ	8位：ウルグアイ

選手団名簿

男子

役職	名前	所属
団長	福地 賢介	(公財) 日本ハンドボール協会 全日本学生ハンドボール連盟
チームリーダー	松 喜美夫	(公財) 日本ハンドボール協会 函館大学
監督	Nemes Roland	(公財) 日本ハンドボール協会 筑波大学
コーチ	豊田 賢治	(公財) 日本ハンドボール協会 国士館大学
トレーナー	尾中 祐二	(公財) 日本ハンドボール協会 トレーナーステーション
情報分析	仲田好邦	(公財) 日本ハンドボール協会 名桜大学
総務	市瀬祐樹	全日本学生ハンドボール連盟

	名前	所属	出身校
1	友兼 尚也	日本体育大学	北陸高校
2	岡本 大亮	中部大学	岩国工業高校
3	藤 勢流	日本体育大学	北村山高校
4	岡松 正剛	筑波大学	熊本国府高校
5	堀 広輝	筑波大学	市立岐阜商業高校
6	徳田 新之介	筑波大学	岩国工業高校
7	水町 孝太郎	日本大学	西南学院高校
8	玉川 裕康	国士館大学	浦和学院高校
9	斎藤 大生	国士館大学	紀北農芸高校
10	吉野 樹	明治大学	市川高校
11	杉岡 尚樹	中央大学	桃山学院高校
12	原田 一沙	大同大学	大同大大同高校
13	東江 雄斗	大同特殊鋼	早稲田大学
14	加藤 芳規	トヨタ車体	筑波大学
15	橋本 明雄	豊田合成	関西大学
16	岡元 竜生	トヨタ車体	中部大学

女子

役職	名前	所属
チームリーダー	樫塚 正一	(公財) 日本ハンドボール協会 全日本学生ハンドボール連盟
監督	楠本 繁生	(公財) 日本ハンドボール協会 大阪体育大学
コーチ	齊藤 慎太郎	(公財) 日本ハンドボール協会 大同大学
情報分析	岸本 健太	(公財) 日本ハンドボール協会 ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング
ドクター	沖本 信和	(公財) 日本ハンドボール協会 沖本クリニック
トレーナー	田中 健一	(公財) 日本ハンドボール協会 N クリニック

	名前	所属	出身校
1	河嶋 英里	三重バイオレットアイリス	大阪体育大学
2	茶園 遥	北國銀行	大阪体育大学
3	大山 真奈	北國銀行	大阪体育大学
4	角南 果帆	三重バイオレットアイリス	大阪体育大学
5	板野 陽	広島メイプルレッズ	大阪教育大学
6	石井 優花	オムロン	東京女子体育大学
7	堀川 真奈	広島メイプルレッズ	大阪教育大学
8	秋山 なつみ	大阪体育大学	洛北高校
9	松本 ひかる	大阪体育大学	華陵高校
10	佐々木 春乃	大阪体育大学	高岡向陵高校
11	徳永 千紘	大阪体育大学	今治東中等教育学校
12	馬場 敦子	大阪体育大学	高松商業高校
13	北原 佑美	大阪体育大学	高岡向陵高校
14	三田 未稀	東京女子体育大学	佼成学園女子高校
15	岩渕 いくみ	日本体育大学	水海道第二高校
16	佐原 奈生子	大阪体育大学	学法福島高校

参加報告　選手団代表　福地 賢介

はじめに、今大会での特筆事項として、女子チームが合宿地の関係で、関西空港発イスタンブール経由スペイン・マラガ空港の往復フライト利用であったため、大会期間中の 7 月 29 日にイスタンブール空港近くで起きたテロ事件で帰途の便が危惧されたことであった。JHA 田中茂氏が 7 月 1 日に帰国予定であったので、イスタンブール空港の状況を確認してもらい通常運行との連絡を受けて、関係者の方々に心配を戴いたが無事帰国出来てほっとすると共に、あらためてテロの恐怖を再認識させられたが、今後の各カテゴリーの対応も充分考慮されてきていることを感じさせられた。

空港にマスコットの歓迎看板があり到着チームが記念写真の撮影があったが、前回大会でのポルト空港でも同様の出迎えを受けている。開催地はマラガ空港からバスで 50 分程のマラガ郊外アンテクラという丘の中腹に位置する町で地中海地方にみられる白を基調にした家の並ぶ綺麗な町であった。

各大会でもたつく手続き（パスポート確認･ID カード発行･配布物の確認・他）も円滑で、諸会議その他、タイムスケジュールもきちんとしていた。また、宿舎は、四つ星ホテルで、従来の大学のゲストハウスや学生寮と異なり、居住環境は良好であった。また、食事もメイン料理のバリエーションにやや乏しさがあったが、デザート類も含めて不満はなかった。

試合会場はメイン（6 ～ 7 分）・第二会場（8 ～ 10 分）共に徒歩でも充分に行ける範囲であったが、強い日差しの影響等も考慮してか、競技に向かうチーム用に送迎用のバスが準備され、更に、競技観戦のための各国選手団の為に、シャトルバスが配備されていた。通常競技参加選手団へのバス配備はあるが、定期シャトルスまでは配備がなく、他の面と合わせ細かい気配りを感じた。

日本では競技規則改正は 4 月から行われていたが、各国も一応の対応は見られテクニカルミーティングの時にも新ルールに関しての質問や確認はなかった。ただ,TD に関しては、時としてぎこちなさが目についた。例えば、韓国がゴールネットの中吊りネットを､速攻時の球出しを円滑にするために、ゴールネットにテープで止める行為なども、見落としたりしていたが、タブロスキー氏（大会競技委員長）の立ち合いのもと、審判・TD と共に確認してもらいテープの止を排除したが、FISU には、これに関してペナルテイー等の取り決めがなく次回までに対応をとの事であった。

大会に、男子全日本オルテガ監督（マラガ出身）が、家族と観戦に来て各選手の活躍を見てもらったが、日本の各選手がどの様に目に映ったか。

大会はテレビ中継もあり、日本でも YouTube で観戦できたと連絡を受けて多くの激励の電話・メールを受けた。



今大会の選手団編成に関して、スタッフは、男女共に監督が初の世界学生大会ということで、男女共にベテランのチームリーダーを配した。選手は､従来であると教育実習の対応、他を考慮して、3 月末の一次エントリーの時に決定していたが、今回は、全日本チームとの関係で、最終エントリー締切りの一週間程前の決定で、日本リーグ・各大学関係先に迷惑をかけており、この場を借りあらため謝罪の意とさせていただきます。

今回から、田村委員長の進言で、はじめて男女にアナリスト（情報分析）を帯同したが、時間を問わずデータ収集・分析を行ってくれ、選手のコンディション維持に尽力してくれたドクター・トレーナーと共に貴重な戦力として貢献してくれ、今後も帯同の必要性を痛感した。感謝の意を表したい。

男女共に念願のメダルまで、あと一歩であった。競技関係に関してはスタッフの報告を拝読願いたい。

最後に、大会参加に際して協会をはじめ多くの方々のご支援ご協力を賜り、お礼と感謝の意を表させて戴きます。

参加報告　男子代表主将　岡元 竜生

【はじめに】

第 23 回世界学生選手権に参加するにあたり、ウェアー等の提供、ボール等の用具の提供、トレーニング会場の提供などご支援頂き深くご御礼申し上げます。

【2016 年度 U-24 男子日本代表チームの活動を通して】

今回の U-24 男子日本代表チームは、チーム創りをする上









での準備期間が短く、選手全員が共通理解をする上での困難なことも多かったと思いますが、その中でもネメシュ・ローランド監督、豊田賢治コーチの下、非常に濃い内容のトレーニングをすることができました。

予選リーグでは、ロシア・チャイニーズタイペイ・スペインを倒し、グループ 1 位通過しました。大きな勝因の 1 つに、新しい DF システムが全試合を通して大きく発揮できたことだと思います。また、キーパー陣の好セーブや個々の能力が高い BP 陣に大事なところでの 1 点でとても助けられました。日本にメダルを持ち帰ることが我々の目標でありましたが、準決勝の韓国戦で延長の末敗れ、続く 3 位決定戦で再びスペインとの試合、2 点差で敗れ 4 位という結果で大会を終えました。本当にメダルまであと一歩というところまでいっただけに悔しさが残る大会となりました。しかしながら、今回



の世界学生で海外の大きい選手、ヨーロッパの選手相手にも考え方やシステムの変化で十分通用することを実際に実感したことが大きな収穫であり、この経験は 2020 年の東京五輪でのメダル獲得へ繋がる大会であったと思います。この世界学生で得た経験や悔しさを新たな成長へ繋げていきます。

参加報告　女子代表監督　楠本 繁生

【はじめに】

6 月 27 日からスペイン・マラガで開催されました世界学生ハンドボール選手権においてヘッドコーチという機会を与えて頂けたこと、また日本協会、全日本学生連盟の皆様方はもとより選手所属チームの監督、ご家族、そして福地団長をはじめ、大会準備から沢山のご尽力を賜りました多くの方々に、まずは感謝を申し上げたいと思います。

大会までの短期間の中で、3 回の強化合宿を行うことができ、第 2、3 回の合宿では、戦術、テクニック、スピード面は北國銀行に、高さ、フィジカル面は男子高校チームに協力してもらい、DF トレーニングを中心に、いかに守って走るか、日本チームの勝利にはこの試合展開でしか勝因はないと考え、練習を行ってきました。合宿の終盤には、北國銀行 GM の村上様に壮行会を開いて頂くなど、長期の合宿を受け入れて頂いた荷川取監督や北國銀行の選手の皆様、また北陸高校

の志々場先生、福村先生、小松工業高校の中谷先生、各チームの選手のお力添えを頂き、大会までの準備期間をケガ人なくチーム力を蓄えることができました。この場をお借り致しまして、心より厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



【チーム目標】

予選 1 次リーグ通過、メダル獲得

【チーム戦術】

全体

・失点を 25 点以内に抑えること
・立ち上がり 10 分を意識し、DF からの FB でシュートチャンスを作る
・センタープレイヤーを中心に 60 分間のゲームコントロール

DF

・高い位置で非利き手側に抜かせて、反対側からのフォロー
・2 枚目 DF が積極的にクロスアタックを狙い、フリーでロングシュートを打たせないアグレッシブな DF →全員で連動してボール側を守る意識
・9m 内で安易にプレーさせない（特にポストへパスを入れさせない）
・相手のロングシューターに対してはそのまま DF
・GK との連携
　苦し紛れのロングシュートは GK 勝負
　エリア際でなるべくシュートを打たせない

OF

・攻撃の起点をはっきりする
・2 対 2 をベースとし、そこから 3、4 人目の動き
・コンビネーションプレー
・ノーマークシュートの確実性

FB

・フロントコートに速くボールを運ぶ
・ポストを起点に 2 対 2 からクロス → オープンへのずらし

【大会結果】

◇予選 Y グループ

第 1 戦　日本　● 26（14 － 11、12 － 16）27 ○　スペイン
第 2 戦　日本　○ 53（22 － 9、31 － 7）16 ●　インド
第 3 戦　日本　● 22（11 － 12、11 － 11）23 ○　ルーマニア

予選グループ 3 位

◇ 5 － 8 位順位決定戦

日本　○ 34（15 － 9、19 － 9）18 ●　ウルグアイ

◇ 5 － 6 位決定戦

日本　○ 28（10 － 14、18 － 12）26 ●　チェコ

以上の試合結果で、第 5 位という不本意な大会結果となりました。予選グループは優勝したスペイン、準優勝のルーマニアと対戦するなど、厳しい一次リーグとなりました。どちらに対しても粘り強く戦い、試合終盤まで接戦に持ち込みましたが、どちらも 1 点に泣くゲームとなりました。やはり、初戦のスペイン戦を勝ちきれなかったことが、結果的に良い波に乗れなかったことに繋がったと感じます。どの年代の大会でも初戦というのは、その大会の今後を左右するもので、そこでどんなゲームにもつれ込んだとしても勝てるだけの準備をしていく必要があると再確認しました。また、攻撃のきっかけというのはいたってシンプルであるが、戦術の変化のスピードが速く、試合時間残り数分でリードしていてもあっという間に追いつかれ、逆転を許してしまうということが起こりうるのが世界と日本国内の違いであると実感しました。







今後、競ったゲームをものにするためには、誰もが思いつかないような奇想天外な発想を持ち、それを監督だけでなく選手をも理解し、実践できるチームを創り上げる必要があると考えます。その根底にあるのは「はさむハンドボール」であり、２対２を崩し、そこからの展開で数的優位の状況をつくり、確実にシュートまでいけるだけの選択肢を持つことです。基本的な「はさむハンドボール」をまず徹底して行い、それにどれだけ上乗せしていけるかだと考えます。

しかし、世界の強豪国相手に互角に渡り合ったことは、今大会の良い収穫であったのではないかと思っています。メダル獲得という目標を達成することはできなかった選手の悔し涙が、必ず次のステップで活かされ、飛躍してくれることを選手には強く期待しています。

最後になりましたが、チームの原動力となり、選手達の力を最大限に引き出して頂いたチームリーダー・樫塚先生、コーチ・齊藤先生、分析・岸本さん、ドクター・沖本先生、トレーナー・田中さんには感謝の気持ちでいっぱいです。苦しくも辛くも、楽しい１ヵ月間でした。



参加報告　女子代表主将　大山 真奈

今大会出場にあたり、ご尽力いただいた日本ハンドボール協会並びに全日本学生連盟の皆様方に心より御礼申し上げます。

６月27日から開催される世界学生選手権大会に向けて「メダル獲得」を目標に掲げ、５月末から６月中旬にかけ、３回の国内強化合宿を行いました。

世界の選手を相手に戦う際に日本は体格で劣ってしまうため、これまではオープン DF が主流とされてきましたが、今回自分たちは基本的に６：０をベースに、バックプレーヤーの大きさや力量に応じてけん制に出たり、アタックディフェンスを多用するなど、抜かれる方向を制限し、利き手側を取るといったことを約束事として行ってきました。また OF ではセンタープレーヤーがゲームメイクをしながらきっかけを明確にし、２対２から継続して３人、４人と連続攻撃を加えることで、DF のマークミスや数的有利な状況を作り出すことで得点を加算していく戦術を強化してきました。

その結果、５試合を通して特に感じたことは１点の重みです。予選リーグでは、３試合中２試合が１点差負けという悔しい敗戦となりました。この１点の差は、決して日本人が体格差で負けているからではないと思います。やはりプレーの積み重ねがあらわれたからだと思います。

今大会５位という納得のいく成績ではありませんでしたが、チーム全員がこの悔しさを忘れず、また各カテゴリーの日本代表として戦えるように、そして世界で結果を残せるように日々精進していきたいと思います。

最後になりましたが、今大会出場に際しご支援、ご協力そして応援してくださいました皆様に御礼申し上げます。ありがとうございました。

戦評

男子

■6月27日（月）

日本　29（16-12、13-13）25　ロシア

世界学生初戦の相手は、同大会で過去に一度、勝利をしているロシアとなった。立ち上がり体格で勝るロシアに先制点を与えるものの、徳田のランニングシュートが決まり、即座に同点となる。その後も一進一退の攻防が続くが、徳田・水町を中心に得点を重ね、GK加藤の好セーブ及び徹底したDFを繰り返し、4点リードで前半を折り返す。

後半、ロシアはパワープレーで日本のDFを崩しはじめ、逆転を許すものの、東江の冷静なゲームコントロール及び得点により、流れを取り戻す。後半ラスト10分には、逆転に成功し、最後まで攻守共に粘りのある戦いをみせ、29対25で試合終了。

■6月28日（火）

日本　41（16-9、25-14）23　チャイニーズタイペイ

予選リーグ2戦目の相手は、チャイニーズタイペイ。立ち上がり日本は6：0DFで対応するが、相手のエースによるカットインを守り切れず、開始早々、先制点を許してしまう。日本も杉岡のサイドシュートや徳田のカットイン等により得点を重ねる。前半15分までは拮抗した展開になるが、その後は、相手チームのテクニカルミスが増え、日本はそのミスを確実に得点に結びつけ、前半は16対9の7点差で折り返す。

後半に入ると、水町の連続ミドルシュート・橋本のポストシュート・堀のサイドシュート等、多彩な攻撃をみせ15分まで攻撃の手を緩めることなく、26対12の14点差と差を広げる。相手も吉野・斎藤にダブルマンツーを仕掛けるものの広くなったDFの間をうまく攻撃し、杉岡のサイドシュート橋本のポストシュートなど、更に得点を奪い試合を決める。最終的には、41対23の18点差で勝利する事が出来た。

■6月29日（水）

日本　33（13-16、20-12）28　スペイン

予選リーグ3戦目、強豪スペインとの1戦。立ち上がり、機動力を活かしたDFで流れを掴むと徳田のロングシュート、堀のサイドシュート、吉野のカットインシュートが連続で決まり、立ち上がり3対0の好スタートを切る。しかし、スペインも日本のテクニカルミス、シュートミスを着実に得点し、15分には、5対4とリードを許す。その後もアグレッシブなDF、連動性のあるOFから水町のロングシュート、堀のサイドシュート、玉川の速攻等で応戦するが、16対13の3点ビハインドで前半を折り返す。後半の立ち上がりから両チーム得点の取り合いとなり一進一退の攻防が続く。後半15分過ぎからスペインは体力的に厳しい表情をしており、逆に日本は緩める事なく果敢に攻め、25分に逆転に成功。ラスト5分に入るとスペインは、テクニカルミスが増え、日本は、最後まで攻め続け、33対28と劇的な勝利。予選リーグ3勝で1位通過し、7月2日からのセミファイナルにつなげた。

■7月2日（土）

日本　32（13-15、16-14、1-4、2-3）36　韓国

決勝トーナメント準決勝、韓国との一戦。前半立ち上がり、韓国の高い3-2-1DFに対応出来ず、テクニカルミス等でなかなか点数が取れない展開に。開始6分に堀のサイドシュートが入り、3対1となる。その後も水町のカットインや徳田・杉岡の速攻などで得点を重ねるものの数値には出ないDFの連携ミスなどが重なり、1度もリードする事なく、13対15で前半終了。

後半に入り、日本は7人攻撃を仕掛け、試合のテンポを変える試みを行うと玉川のミドルシュート、堀のサイドシュートが決まる。しかし、韓国も早いリスタートや速攻などで得点し、なかなかスコアが縮まらない。後半15分過ぎからGK加藤の好セーブから原田・東江のカットイン、徳田のミドルシュートの連続得点から差は縮まり始める。後半残り2分を切り、玉川のパワープレーからポストシュートが決まり、最後の最後でこの試合初めてのリードを得る。しかし、韓国も早いパス回しからポストに渡り、そのシュートを阻止するもののエリア内の反則となり、7mTを決められ、同点になり延長戦に入る。延長前半はスタートから1人退場の状態から始まり、立て続けに2連取される。日本は原田の気迫溢れるプレーで得点を取るが延長前半を1対4で折り返す。延長後半に入り、DFで粘りを見せるもののOFでは、7人攻撃などを仕掛けるがなかなか得点が取れず、逆に韓国は冷静に時間を使い、最終的に32対36で終える。

■7月3日（日）

日本　27（15-19、12-10）29　スペイン

大会最終戦、銅メダルを掛け挑んだスペインとの戦いはスペインの攻撃から試合開始。開始早々、スペインエースのカットインシュートがライン内防御の反則となり、7mTでスペインが、先制。日本も玉川のミドルシュートで即座に同点とする。スタートから硬さが見える日本は、上手くポストを使ったスペインの攻撃に対応出来ず、なかなか点数を縮められない展開となる。それでも徳田・藤・原田の得点で前半を15対19の4点ビハインドで折り返す。

後半からまた気持ちを入れ直し挑んだ日本だったがスペインの連続得点により厳しい出だしとなる。この状況でGK加藤に代わり出場したGK岡本が好セーブを連発。その間、徳田・水町・杉岡の得点により最大5点の差が一時は1点差までに詰め寄るが、スペインのGKによる好セーブによりシャットアウトされ逆転するチャンスを逃してしまう。最終的には、27対29で敗戦となった。

女子

■6月27日（月）予選リーグ

日本　26（14-11、12-16）27　スペイン

日本は、立ち上がりに松本のサイド2連取でリードを奪い、その後も堅いDFからリズムを掴みたかったが、スペインは№3、№4の力のあるロングなどで4連取を許す。何とかペースを取り戻したい日本は、角南のポストで再びリードを広げると、スペインも№10の

高さのあるロング、カットインなどで追いすがるが、大事な場面でミスが続き、日本が3点リードして前半を終了する。

後半立ち上がりからスペインは、パワーを生かした攻撃で得点を積み重ね、№5のパワーあるプレーに日本DFは退場してしまい、一気に追いつかれる。中盤に入り、このまま主導権を渡したくない日本は、佐々木のロングシュート、大山のカットインなどで再び2点のリードを奪う。しかし、自力に勝るスペインは最後までパワーを生かしたOFで力を緩めることなく、再び逆転し、27対26でスペインが勝利した。日本は何とも悔しい敗戦となった。

■6月28日（火）予選リーグ

日本　53（22-9、31-7）16　インド

インドのスローオフで前半スタート、日本は6-0DFで積極的にボールを奪いにいく。インドのテクニカルミス、パスカットから角南、松本らの速攻で5連続得点を挙げる。インドも4分過ぎカットインで得点を挙げるが、日本は5分過ぎからメンバーを入れ替え、堀川、石井、河島を投入し、攻撃の手を緩めることなく三田、石井の7mT、河島のサイドで連続得点により、10分過ぎには10対3と完全に試合の主導権を握る。日本は14分過ぎに、1人退場している中でも、北原が強烈なミドルを打ち込み追加点を奪う。インドはOFでクロス攻撃を多用し、日本のマークミスを誘い、№7、№5で連続得点を挙げるが、日本は石井、秋山、堀川が確実にシュートを決め、22対9と大きくリードして前半を終了する。

後半に入っても日本の猛攻は衰えず、開始早々に佐々木がロングを決め23点目を奪うと、DFではインドのオフェンスのキーマン№2にマンツーマンDFで攻撃のリズムを崩したところを、大山、角南、秋山の連続速攻などで6連続得点。インドがタイムアウトを請求、タイムアウト後のOFで、マンツーマンにつかれていた№2がカットインを決めて後半1点目を奪うが、日本は、再び足を使ったDFでボールを奪い、大山、角南、松本、三田の連続速攻、セットOFでは、エース佐々木のロング、堀川のポスト、松本のサイドと次々と得点を重ねる。最後まで日本は積極的なDFからの速攻で確実に得点を奪い、最終的には53対16の大差でインドに勝利した。

■6月29日（水）予選リーグ

日本　22（11-12、11-11）23　ルーマニア

日本のスローオフで開始された試合は、大山の連取で幕を開けた。対するルーマニアも№88の力強いシュートで対抗、一進一退の攻防が続く。中盤に入り、大型選手相手にロングシュートが阻まれ攻め手を欠いてきた日本は、ルーマニア№88のカットインなどで4連取され逆転を許してしまう。20分過ぎ7対9と2点リードされたところで、日本はタイムアウトを請求、これをきっかけにリズムを取り戻したい日本だが、高さあるDF、GKにシュートを阻まれ得点することができず、苦しい時間が続いたが、途中出場の河嶋が速攻を決めると、三田、角南の得点などで同点に追いつく。終了間際には相手が1人退場し、勝ち越しのチャンスを得たが、得点に結びつけることができず、前半を1点ビハインドで終える。

後半に入り、ルーマニア退場のチャンスを生かしたい日本だが、逆に失点をしてしまう。それでも佐々木の速攻、ロングで追いすがり、一進一退の攻防が続く。中盤に入り、日本もGK馬場の好セーブ、松本の速攻、大山のミドルなどで徐々にペースを取り戻し、1点差まで追い上げる。さらに、疲れから足が止まってきたルーマニアは退場者を出すが、日本はこのチャンスを生かすことができない。1点ビハインドでむかえた残り1分には7mTのチャンスを得るが、相手GKにファインセーブされ、同点に追いつくことができず、22対23で惜しい敗戦となった。この結果、予選リーグ3位となり、5-8位決定戦に回ることになった。

■7月1日（金）5-8位決定戦

日本　34（15-9、19-9）18　ウルグアイ

5-8位決定戦に回った日本の初戦は南米ウルグアイ。負けられない日本だが、ウルグアイが日本ディフェンスの隙をついたミドルシュートで先制。この後もウルグアイの独特のリズムにペースを掴めない日本だったが、河嶋、大山、角南の速攻で得点を挙げ、徐々に点差を広げていく。対するウルグアイは、力強いポストプレーや、スピードあるカットインで7mTを奪い、必死に食らいついてくる。終盤に入り、シュートミスが続きリズムが悪かった日本だが、ウルグアイが1人退場したチャンスに、北原、秋山、松本の3連打で一気に突き放し15対9で前半終了。

後半に入っても、大山がカットインで連取し、好スタートを切る日本のペース。その後も、足を使ったDFでウルグアイOFを封じ込め、堀川、徳永、松本などの速攻でさらに点差を広げる。ウルグアイも最後まであきらめず、スピードあるプレーで日本DFの間を割ろうとするが、なかなか得点に結びつけることができない。結局最後まで走力の落ちることがなかった日本が、34対19でウルグアイに完勝した。この結果、チェコとの5-6位決定戦に進出することとなった。

■7月2日（土）5-6位決定戦

日本　28（10-14、18-12）26　チェコ

今大会最終戦、日本はチェコと対戦。立ち上がりから№18のカットイン、速攻などでリードを奪われる。追いつきたい日本だが、パスミス、シュートミス等が続きリズムか掴めず、早々にタイムアウトを請求。タイムアウト後、松本の速攻で1点を返すも、再び№3のサイド、№9のスピードあるカットインなどで3連取され、序盤で1対7と序盤で大きくリードを許す。中盤に入ってからは日本にも攻撃のリズムが出てくるが、チェコもスピードとパワーを生かした攻撃で得点を挙げ、お互いに点を取り合う展開となる。しかし、日本は石井の速攻を機に、徳永、三田などの連続得点で点差を縮め、10対14と追い上げて前半を終了する。

後半立ち上がりから、松本の速攻、佐々木のロングで日本がペースを掴んだかに思えたが、ここから日本にミスが続き、逆に点差を広げられ後半10分で6点差と苦しい展開となる。しかし、ここからエース佐々木のロング、後半途中出場のサイド・河嶋の連続得点などで一気に2点差まで追い上げる。チェコはタイムアウトを請求、落ち着きを取り戻したいところであったが、日本のGK馬場を中心とした固いDFを攻め切ることができない。その間に、日本は河嶋の速攻、佐々木のミドルシュートなどでついに同点に追いつく。勢いに乗った日本は、攻撃の手を緩めることなく、河嶋のサイド、速攻などで一気に逆転に成功。チェコも№17のロングなどで追いすがるが、日本は河嶋の速攻で連取、28対26で勝利し、5位で大会を終えた。

U-24 世界学生選手権 医事関連報告
2016.6.23-7.5
男女チームドクター 沖本 信和

男子チームは成田からブリュッセル経由ANA便、女子はイスタンブール経由トルコ航空便で6月23日に出発しました。私は女子チームで出発しました。

スペインでのホテルは4つ星、ジム併設で、申し分なしでした。参加全チームが宿泊だったために連絡や会議はスムースに行われました。近くにスーパー、体育館、試合会場があり便利でした。氷はホテルで確保することができました。大会期間中、何人かの選手たちはジムでウエイトトレーニングを行いました。

健康状態ですが、

1. 下痢、腹痛、食欲不振などを訴える選手は少数でした。ドクターバッグ持参薬で十分でした。空気の乾燥、やや高地ということで、のどの痛みや、咳、鼻出血などが総勢45名中7人いました（発熱は無し）が、うがい、手洗い、部屋の湿度調節（風呂にお湯を張ったり、洗濯物）、マスク、感冒薬、時には抗生物質などで対処しました。毛嚢炎の選手2名は抗生剤投与しました。全例、ドクターバッグ持参薬などで1から5日以内に症状消失しました。
2. 筋骨格系では、いつものように、足関節障害、筋挫傷、膝半月板・靭帯損傷、シンスプリント、肘・肩関節障害、腰椎椎間板障害、腰椎分離症など陳旧性・亜急性の問題を抱えた選手が約半数でした（事前合宿、男女ともにメディカルチェックを行っていたので、準備品や心の準備も楽でした）。現地では男子は尾中トレーナーが、女子は田中トレーナーが毎日、夜遅くまでケアをしてくれました。コンディショニングは上手くいったと考えております。
3. 腰椎分離症の選手にカテラン針使用した分離部ブロック注射、アキレス腱周囲炎の選手にブロック注射、ボクサーナックルの選手にブロック注射、腓骨筋腱炎の選手にブロック注射など、計8回の注射を行い、全ての選手が試合に出場できました。

特記すべきは

1. 男子選手で歯科通院中であった選手が歯痛悪化のため、現地で歯科に行きました。その際に歯科ドクターから、親切にしていただき、消毒薬とブラシの処方で改善しました。抗生剤と消炎鎮痛剤はドクターバッグ持参薬を使用しました。
2. 男子準決勝で相手選手の手があたり、右眼球打撲・出血しました。アイシング・点眼などで試合は最後まで継続しました。帰国後に眼科受診しています。
3. 男子3位決定戦で相手選手とコンタクトし、鼻骨骨折しました。試合中に直ちに整復（右に強く、偏位していました！）し、試合には出場し続けました。帰国後に専門医受診しています。

ドーピング対策は事前合宿から、ドーピング教育を施しており、各選手に必ず薬品・サプリメント使用時は連絡するように周知徹底していたので、メールなどで頻繁にチェックが行えていました。メールやラインが普及しているので、選手とメディカルスタッフが緊密に連絡を取り合うことは簡単だし、重要なことであると思われます。また、新しい試みとして強化本部からの通達で、全スタッフ、選手にWADA（世界アンチドーピング機構）のアンチドーピングを目的としたe-learning受講（約2時間程度かかります。サイト内案内ページ：https://www.wada-ama.org/en/resources/general-anti-doping-information/alpha　ALPHAログインページ：http://alpha.wada-ama.org/login/index.php　日本語を選択することができます。）を大会前大会期間中の忙しい中で全員各自行い終了証を取得しました。ドーピング対策は万全であったと言えます。今大会でのドーピング検査は男女ともに決勝戦で各チーム1名ずつ行われたようでした。

悲願の世界大会でのメダルには及びませんでしたが、男子はロシア、台湾、地元スペインを下し、予選リーグ1位通過、その後、韓国、スペインに惜敗したものの、メダル獲得と遜色のない4位でした。

女子は予選リーグ地元スペイン、強豪ルーマニアにいずれも1点差で惜敗、インド、ウルグアイ、チェコに勝ち5位でした。男子同様にメダルまで紙一重でした。

医事員会の皆様、トレーナー部会の皆様、また、協会各位の皆様、無事（イスタンブール経由も問題なく）戦うことができました。深謝申し上げます。男子・女子スタッフ・選手・トレーナーの皆様、有難うございました!!

行けるぞ！　日本！

第4回U-22東アジア選手権

The 4th East Asian U-22 Handball Championship

開催地：中国・蘇州市
日　時：2016年7月4日(月)～7月10日(日)

最終順位

【男子】優勝：韓国　2位：チャイニーズタイペイ　3位：**日本**　4位：中国　5位：香港

【女子】優勝：韓国　2位：中国　3位：**日本**　4位：チャイニーズタイペイ

■選手団名簿

男子

役　職	氏　名	所　属
団長	津川 昭	（公財）日本ハンドボール協会
監督	所　努	（公財）日本ハンドボール協会　総社高校
コーチ	古家 雅之	（公財）日本ハンドボール協会　和歌山県庁
GK コーチ	荻田 圭	（公財）日本ハンドボール協会　湯沢高校
ドクター	田村 格	（公財）日本ハンドボール協会　海上自衛隊／自衛隊中央病院
トレーナー	飯田 純一郎	（公財）日本ハンドボール協会　株式会社Ｊ・フロントライン

	氏　名	所　属	出身校
1	阿部 奎太	国士舘大学	学法石川高校
2	高光 凌	国士舘大学	下松工業高校
3	徳田 廉之介	岩国工業高校	平田中学校
4	堀田 陽大	大阪体育大学浪商高校	大阪体育大学付属中学校
5	服部 將成	春日丘高校	笹島中学校
6	山田 翔騎	大分高校	大分中学校
7	髙野 颯太	浦和学院高校	府中第四中学校
8	萩原 奨太郎	横浜創学館高校	茅ヶ崎中学校
9	村木 幸輝	総社高校	総社西中学校
10	若狭 圭悟	総社高校	操南中学校
11	浅川 律樹	大阪体育大学浪商高校	大阪体育大学付属中学校
12	助安 大成	岩国工業高校	岩国中学校
13	藤田 龍雅	法政二高校	東久留米西中学校
14	部井久 アダム勇樹	博多高校	多々良中央中学校
15	矢野 世人	大阪体育大学浪商高校	大阪体育大学付属中学校
16	藤川 翔大	岩国工業高校	岩国中学校

女子

役　職	名　前	所　属
団長	津川 昭	（公財）日本ハンドボール協会
監督	石川 浩和	（公財）日本ハンドボール協会　佼成学園女子高等学校
コーチ	辻 賀奈子	（公財）日本ハンドボール協会　京都府立　すばる高等学校
ドクター	田村 格	（公財）日本ハンドボール協会　海上自衛隊／自衛隊中央病院
トレーナー	宿利 政生	（公財）日本ハンドボール協会　東京・三鷹／連雀整骨院

	名　前	所　属	出身校
1	榎 和奏	大阪体育大学	福岡女子商業高等学校
2	新川 紫央	関西大学	宣真高等学校
3	行本 朱里	日本体育大学	川崎市立高津高等学校
4	並木 梨紗	東京女子体育大学	群馬県立富岡東高等学校
5	吉岡 紗耶	大阪体育大学	四天王寺高等学校
6	浜 真尋	中京大学	小松市立高等学校
7	林 玲花	中京大学	氷見高等学校
8	土居 佳加	武庫川女子大学	四天王寺高等学校
9	八田 桃子	日本女子体育大学	昭和学院高等学校
10	中村 風夏	川崎市立高津高等学校	川崎市立西中原中学校
11	中山 佳穂	夙川学院高等学校	夙川学院中学校
12	金山 桃歌	高岡向陵高等学校	富山市立堀川中学校
13	金城 ありさ	佼成学園女子高等学校	浦添市立港川中学校

参加報告　男子監督　所　努

第４回 U-22 東アジア選手権に参加して

はじめに

第４回 U-22 東アジア選手権出場に際し、日本ハンドボール協会の関係者をはじめ、選手を派遣して頂いた所属チームの先生方やご家族の皆様には、多大なご理解とご協力を賜り心から感謝申し上げます。さらに、日本から心温まる応援のメッセージを送ってくださった方々、結果を楽しみにしてくださった方々に感謝申し上げます。目標としていた「東アジアチャンピオン」には届きませんでしたが、アジアユース選手権を控える U-19 日本代表にとっては良い経験をさせて頂きました。本当にありがとうございました。

大会報告

今大会の準備としては、選手選考と基本戦術の確認のために、５月 20 日～ 24 日に NTC で第１回強化合宿を行いました。特に、コンタクト DF を重視した DF 練習に重点をおきました。次に、大会直前の６月 29 日～７月２日に第２回強化合宿を NTC で行い、OF 戦術の確認に時間を割いて、ゆっくりと丁寧に動きの確認と狙いを選手に理解させました。準備期間が十分であったとは考えていませんが、この年代の現状を踏まえると最低限の準備はしたと思っております。

大会結果については、５チーム中３位という結果でした。決して満足いくものではありませんでしたが、収穫も多い大会でした。初戦の韓国戦では、ジュニア代表チーム（21 歳以下）で参加している相手に対して、準備してきた DF がしっかりとでき、後半の 10 分まで一進一退のゲームができたことは、選手の自信につながったと感じております。香港戦に勝利した後、休息日をはさんで上位進出の鍵を握るチャイニーズタイペイとの対戦では、序盤から相手の早さに準備してきた DF が機能せず、連続失点からのスタートとなりました。この試合では、終始冷静な判断ができずにミスを重ね、相手のペースで試合を進めてしまいました。残り 15 分から DF システムを５：１に変更し、５連続得点を挙げることができましたが、前半の得点差を縮めることができず、４点差で敗戦してしまいました。この試合では、現地での生活が続き疲労も少しずつ出てくる中で、しっかりとパフォーマンスを発揮することの難しさを選手は身をもって経験できたと思っています。

最終戦は、メダルをかけた地元中国との対戦でした。大会最終日の日曜日ということで、観客も多く、女子は中国対韓国、男子は中国対日本というカードで、完全アウェーでの試合となりました。日本は、前半３点差リードで折り返すものの、後半体格に勝る中国は PV プレーヤーにボールを集め、日本にプレッシャーをかけてきました。残り 10 秒にその PV プレーヤーに押し込まれ、25 対 25 の同点に追いつかれてタイムアップ。リバウンドボールを取り切れなかったことに悔いが残りました。最終的には、１勝１分け２敗で中国と並び、得失点差で３位という結果で大会を終えました。

カテゴリーが上の大会ではありますが、韓国との対戦結果を考えると、チャイニーズタイペイに競り負けたことは監督である私のミスであると反省しています。今大会に参加して、U-19 日本代表にとって収穫と課題が見つかりました。そのすべてを、次のアジアユース選手権大会に向けての貴重な財産として捉え、スタッフ一丸となって課題解決に向けた活動をして参りたいと思います。選手たちは、カテゴリーの違う大会に出場させていただき、貴重な体験をしたと思っております。大会を通して、強い気持ちをコート上で表現してくれた選手たちを誇りに思うと同時に、今後の成長を確信しております。

おわりに

最後に、U-19 ユース代表チームに、このような貴重な経験をさせていただいた日本ハンドボール協会の関係者の皆様、所属チームの皆様に改めて感謝の意をお伝えさせていただき、大会の報告とさせていただきます。



参加報告 男子主将 村木 幸輝

U-22東アジア選手権大会に参加して

第4回U-22東アジア選手権は、5カ国が参加、総当りリーグ戦で順位を争いました。今大会は22歳以下の選手が参加できる大会ですが、私たち日本代表チームは19歳以下のユース代表で大会に臨むことになりました。どの国も私たちより体が大きく体格差を感じましたが、日本を代表して出場している以上、結果を残して帰らなければならないという思いで戦いました。

大会初戦は、ライバルである韓国との対戦でした。日本代表チームは、DFではハードなコンタクトとボールに密集し簡単にカットインを許さないこと、OFでは相手DFを密集させて広いスペースを作り、強い1対1で攻めることをテーマとして戦いに挑みました。前半は一進一退の攻防が続きましたが、終盤に退場者が相次ぎ3点ビハインドで前半終了。後半は徐々に点差を離されてしまい、7点差で敗れました。

2試合目の香港戦では、前半開始から6連取するなど終始日本のペースで試合を進め、36対13での勝利となりました。

3試合目はチャイニーズタイペイとの試合。相手のスピードあるプレーにDFの対応が遅れて連取されてしまい、またOFでもテクニカルミスが続いて、4点のビハインドで前半を折り返しました。後半はDFシステムの変更から5連取するなど、逆転への糸口は見えたものの前半の点差が響き、25対29での敗戦となりました。

最終戦は、地元中国との対戦。前半途中6点差をつけるものの退場者がでた間に3連取されてしまい、3点リードで前半を折り返しました。後半も一進一退のゲームとなりラスト10秒で失点し、25対25の同点で試合終了となりました。

大会を通じて、個々の技術向上やフィジカル面の強化をしなければ、国際大会で結果を残すのは難しいということを経験できました。

1勝1分2敗で3位という満足のいく結果を残すことはできませんでしたが、バーレーンで開催されるユースアジア選手権に向けて、収穫と課題の両面を見出すことができて充実した大会となりました。

最後に、津川団長、所監督、古家コーチ、荻田コーチ、飯田トレーナー、大会関係者の皆様、所属チームの監督やチームメイト、いつも支えてくださる両親をはじめ、日本から熱い声援を送ってくださった皆様に感謝し、8月のアジア選手権では世界への切符を獲得できるよう日々練習に励んでいきたいと思います。ありがとうございました。

参加報告 女子監督 石川 浩和

大会に参加して

今大会に参加させていただくにあたりまして、多くの方々にお世話になりました。選手の所属チームの指導者の皆様、練習試合でお世話になりました日本女子体育大学・日本体育大学・東京女子体育大学、協会関係者と業者の皆様にまず御礼申し上げます。また、手前味噌ですが、2回目の国内合宿で味の素ナショナルトレーニングセンターを使用できず、やむを得ず佼成学園女子高校で行いました。清掃や選手のお世話をしてもらった安藤教諭と部員にも感謝を述べさせていただきます。

この度は、女子ユース世界選手権大会を控える中で、U-22東アジア選手権大会に出場できるという幸運に恵まれました。

昨年インドで行われた女子ユースアジア選手権大会に出場した16名の選手のうち、10名が入れ替わりました。それぞれ事情がありますが、一番はインターハイと重なるかもしれないという、毎回起こる問題が大きかったと思います。

今年度、監督を拝命し、日程も把握できたことから、多



くの高校生が辞退することが予想できましたので、関東・関西の大学のご協力を得て、出場できる年齢の選手をたくさん選考会に派遣していただきました。おかげさまで、選手が10名入れ替わりましたが、前大会の時よりも、ポジションごとに特徴のある選手を選考することができました。

国内で２回の合宿を経て、今大会に参加したわけですが、国際公式試合を経験できるというメリットは、大変大きなものがありました。

残念だったのは、世界選手権にむけて18名をエントリーしたのですが、１名が国内合宿の練習試合中に膝前十字靭帯を損傷してしまい、辞退せざるを得なくなってしまったことです。主力として期待していた選手だけに本人もそうですが、本当に残念でした。

また、西日本インカレと重なり、６名の選手が今大会の参加を見合わせることになりました。

11名という少ない人数での参加となり、色々と心細いこともありましたが、辻コーチが選手と一緒にアップから６対６まで動いてくださいました。また、宿利トレーナーがきめ細かく選手のコンディションを把握して適切な状態を保ってくれました。田村ドクターは、世界選手権ではドーピング検査がありますので、それについての知識・理解を選手にわかりやすく伝えてくれまして、選手のお腹の調子など非常に丁寧にご指導もいただきました。

試合では、選手たちには、「体格も年齢もキャリアも格上の相手にしておけば、世界選手権では楽に試合が出来るから、うまくいかなくても落ち込まずチャレンジしよう。」と言い続けました。選手達も、点差が開いても自分達のプレーを磨こうと頑張ってくれました。

初戦の中国戦では、試合にのまれてしまう時間が多かったのですが、２戦目の韓国戦では、前回の世界ジュニア優勝メンバー相手に大差で離されても、果敢にチャレンジしてくれたのがとてもうれしかったです。３戦目のチャイニーズタイペイ戦では、試合開始のスタートダッシュが成功し、勝利することができました。この勝利は、世界女子ユースへの大きな自信となりました。

最終日のさよならパーティーでは、東アジアの国々の役員・指導者・選手が一堂に会し、友情を深めました。吉岡選手と行本選手が優秀選手として表彰されました。

今回得た経験を世界女子ユースで生かして来たいと思い、帰国させていただきました。

最後になりますが、未熟な私に中国でご指導いただきました津川常務理事、出発前に激励いただきました志々場常務理事に、この場をお借りして御礼申しあげます。



参加報告　女子代表　林　玲花

U-22 東アジア選手権に参加して

私達、U-18女子日本代表チームは、７月４日～７月10日まで中国・蘇州市で開催されました「第４回U-22東アジア選手権」に出場させていただきました。

今大会（女子）は、参加国が４チームでの総当たりリーグ戦を行いました。結果は１勝２敗で３位に終わりました。中には大学生チームが代表チームとして参加している国もあり、年上の選手がほとんどでした。

パワーやフィジカル、身長を武器としてくるプレースタイルの相手に対し、日本らしい「守って速攻」から流れを掴むというハンドボールがなかなかできず、逆に自分達の簡単なミスや不安定なDFから相手に主導権を握られることが多かったように思います。

２試合目の韓国戦では、体格やパワー、スピードが違う中で、粘り強く守り、速攻につなげられたり、アウトへの展開を意識して相手のDFを広げてカットインで飛び込んだり、積極的にサイドシュートを狙ったりなど、自分達のやりたいプレーを幾つか出すことができました。しかし、点差が離れていくにつれてチームのムードが下がっていき、相手に押される展開になりました。結果、22対44の大差で負けてしまいました。

今大会を通して、苦しい展開でももっと全員で雰囲気を作ることや、出だしから集中力を高めて積極的にプレーすること、DFの起動力や運動量、シュートの決定率など、個人としてもチームとしても課題が多く見つかりました。また、これは世界でも通用するというようなプレーも幾つかあり、自分達の自信になりました。

大会の出場にあたり、ご支援いただきました皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

そして次の世界選手権では、この貴重な経験を生かし、今回参加できなかったメンバーも全員で一丸となり、日本らしいハンドボールが発揮できるように頑張ってきます。またご支援のほど宜しくお願いします。

戦評 

【男子】

日本　24 (12－15、12－16) 31　韓国

初戦の対戦相手は韓国代表。日本ユース代表チームは、この試合でのDF面では、相手選手にハードなコンタクトすること、ボールに密集して間を簡単に割らせないこと、OF面では、相手DFを密集させて広いスペースを作り、強い1対1を行うことをテーマとして戦った。試合開始直後、ハードなコンタクトで気持ちのこもったDFができたが、韓国№77の力強いミドルシュートで先制された。しかし、日本は矢野のサイドシュートですぐに追いつき、一進一退の攻防を繰り広げる。前半9分には、徳田の鮮やかなミドルシュートでこの試合初めてのリードを奪う。しかし、10分韓国も№18のサイドシュートを皮切りに連続得点で8対6と韓国2点リード。日本は、さらに韓国№25の7mTで連続失点、17分には7対10と韓国に3点のリードを許す。ここから日本は、矢野、高野の連続得点で9対10と1点差に迫る。その後は、GK堀田の好セーブが光り一進一退の攻防が続くが、終盤にハードDFを続ける日本は退場者が相次ぎ、3点ビハインドで前半を終了する。

後半8分、日本は山田のスピードを活かしたプレーにより2点差に迫るも、後半9分からは退場者が相次ぎ、韓国に3連取を許してしまい、17対22とリードを広げられてしまう。その後、キャプテン村木の体を張ったプレーで喰らいつくが、韓国の体格を活かしたプレーにより後半19分この試合最大となる7点差に広げられる。それでも日本は高いDF隊形にシフトを変え、矢野、高野で連取、5点差に追い上げる。しかし、残り10分からはOFでチャンスを作るものの、韓国GKのファインセーブに得点を阻まれ、最終的には7点差で敗れた。初めての国際大会において、ハードなDFをテーマとして掲げて臨んだ試合の中で、終始アグレッシブにコンタクトできたことは、アジアユースに向けて大きな手応えを感じられる試合となった。

日本　36 (21－5、15－8) 13　香港

2戦目は香港と対戦。前日の韓国戦から一夜明け、気持ちを切り替えて試合に臨んだユース日本代表チームは、チーム発足当初からテーマに掲げたハードなコンタクトDFを徹底することを確認し、試合に臨んだ。試合開始早々から、徳田、部井久、藤田らの活躍で6連取し、6対0とリード。高野、矢野を中心に、テーマであるハードなコンタクトDFを繰り返し、15分過ぎからこの日トップスコアラーとなった部井久の活躍で9連取し、24分には18対2とする。

前半を21対5で折り返した日本は、後半も徹底したコンタクトDFを繰り返す。GK高光の好セーブからの速攻も飛び出しさらに8連取。その後も、助安を中心に機動力を使った牽制DFからの速攻を繰り返し、36対13で勝利。次戦の台湾戦に向けて弾みのつく試合となった。

日本　25 (9－13、16－16) 29　チャイニーズタイペイ

3戦目の対戦相手はチャイニーズタイペイ。相手のスピードに乗った攻撃をハードなコンタクトDFで食い止めること、体を張って相手の高いDFラインを突破していくことを確認して試合に臨んだ。試合開始早々、チャイニーズタイペイ№7を中心にスピードに乗った1対1への対応が遅れ、ポストを巧みに使われ連取を許してしまう。日本は、徳田を中心に相手の間を粘り強く攻撃して、中盤は一進一退の攻防が続くが、日本にテクニカルミスが続き、なかなかリズムに乗れないまま22分には7対11とリードを許す。その後日本に退場者が出るが、GK堀田を中心に粘り、数的不利な状況で山田がカットインで獲得した7mTを自らが決めるなど奮闘するも、9対13で前半を終了する。

後半も立ち上がりから3連取を許す苦しい展開。そこから一進一退の攻防が続いたところで、後半15分、日本がDFを高いシステムにチェンジしたことが功を奏し、相手の攻撃を食い止め、その間に矢野、徳田らで5連取し、後半21分には20対23の3点差まで追い上げる。その後、相手に退場者が相次ぎチャンスが来るものの、数的優位の状態での失点が響き、なかなか点差を詰められない。終盤も徳田、高野で追いすがるものの、最終的には25対29で敗れた。終始劣勢の展開の中、焦りからのミスが多く出てしまい、波に乗り切れない試合となってしまった。各局面におけるチームの約束事を徹底することを再確認し、次戦に臨みたい。

日本　25 (14－11、11－14) 25　中国

最終戦は中国と対戦。体格差のある相手に対しても、今大会のテーマとして掲げているハードなコンタクトDFを徹底すること、OF面では的確なポジショニングから個人の強さを出して突破していくことを確認して試合に臨んだ。立ち上がり、日本は高野を中心とした5-1DFが機能し、簡単に得点を許さない。そこから藤田の速攻も飛び出し、開始10分6対3とリードを奪う。中国もポストプレーヤーにボールを集めチャンスを作るが、GK堀田が7mT、ポストシュートを連続セーブして、流れを渡さない。OFでは、部井久のスピードに乗った突破が決まり、前半20分には12対6とリードする展開。しかし、日本に退場者が出た隙に中国に3連取され、前半を14対11と3点リードで折り返す。

後半立ち上がり、日本はミスから中国に3連取され、後半2分に14対14の同点に追いつかれてしまう。そこから日本も3連取して再び突き放しにかかるものの、相手GKの好セーブにより流れを掴めず、再び3連続失点。そこから一進一退の攻防が続く。日本は、藤川らの速攻により抜け出そうとするが、ノーマークシュートをことごとく相手の大型GKにセーブされる苦しい展開。さらに日本に退場者が相次ぎピンチとなるが、この日好調のGK堀田の好セーブで流れを渡さない。後半28分に24対23の1点リードを奪うが、再び退場者が出て、すぐに中国に追い付かれてしまう。後半29分、数的不利な状況で部井久がシュートをねじ込み、勝ち越しに成功。必死に守る日本であったが、残り10秒で中国のポストシュートが決まり、25対25の同点で試合終了となった。大きい相手に対してポストシュートや9m付近のロングシュート等、中央エリアでの失点が目立ったことや、大型GKに対するシュートの精度等、多

くの課題が出た試合であった。大会を通してはハードなコンタクトDF が徹底できたという収穫もあったので、今大会で得た経験を活かしてアジア選手権に向けて取り組んでいきたい。

なお、今大会のベスト 7 に日本から徳田が選ばれた。

【女子】

日本　24 (11 − 19、13 − 15) 34　中国

初戦は、地元中国との対戦。日本のスタートは、LW 吉岡、LB 林、CB 浜、RB 金城、RW 中山、PV 行本、GK 榎で OF からのスタート。立ち上がりから日本は堅さが見え、中国に 3 連取されるが、吉岡のサイド、金城のステップシュートが決まり、2 対 4。DF から速攻に持ち込みたい日本だったが、DF の連係ミスなどでなかなかリズムに乗れず、中国に 5 連取を許す。前半 14 分過ぎから少しずつ DF が機能し、吉岡、浜、中村のシュートで 4 連取し、7 対 10 と追い上げる。その後、日本の攻撃でのミスや退場者により、中国に連取され 11 対 19 で前半を終了する。

後半立ち上がり、DF から吉岡、八田の速攻で連取し、日本の流れになると思われたが、ミスから相手に逆速攻を許し、なかなか点差を縮めることができない。日本は、タイムアウトを取り、自分達がやるべきことを確認した。その後、セット OF から中山のロングシュート、吉岡のサイドシュートで追い上げを見せるが及ばず、24 対 34 で試合終了。DF での連係、速攻への展開などを再確認し、明日の韓国戦に臨みたい。

日本　22 (10 − 22、12 − 22) 44　韓国

2 戦目は韓国との対戦、日本は DF からのスタート。立ち上がりから韓国に 2 連取されるが、日本も中山のサイド、金城の 7mT で 2 対 2 の同点に追いつく。その後、日本はセット OF でのミスが目立ち、逆速攻で立て続けに失点してしまう。4 対 12 となったところで日本がタイムアウトを取り、OF のコンビネーションを確認し立て直しをはかるが、流れを引き戻すことができないまま 10 対 22 で前半終了。

後半開始早々、日本はセット OF から金城がロングシュートを決めるが、韓国のスピードに乗った 1 対 1 に DF が機能せず、連続得点を許してしまう。その後も相手のスピードある速攻と力強い 1 対 1 で失点し、なかなか点差を詰めることができない。日本も最後まで諦めず、並木のポストシュート、吉岡の速攻で追い上げを見せたが、22 対 44 で試合終了となった。今大会最終戦となる次戦・チャイニーズタイペイ戦に向けて、テーマである高い DF の連携とセット OF でのコンビネーションを確認し、チーム一丸となって勝利を目指す。

日本　32 (16 − 7、16 − 13) 20　チャイニーズタイペイ

今大会最終戦、チャイニーズタイペイと対戦。日本は DF からスタート。立ち上がり、日本は中山のサイドシュートで先制点をあげる。その後 10 分まで一進一退の攻防が続く。ようやく 11 分過ぎに吉岡、中山の速攻などで 6 連取、10 対 3 と試合の主導権を握る。チャイニーズタイペイもスピードあるカットインなどで点数を重ねて追い上げる。終盤に入り、シュートミスが続きリズムに乗れない日本だったが、GK 榎の好セーブから速攻で 5 連取、一気に突き放して前半 16 対 7 で折り返す。

後半開始から日本は DF の連係ミス、OF でのミスが続き、相手に 3 連取を許す。何とか日本の流れに持ち込みたいところだが、退場者が出たり、ノーマークシュートを連続で外すなどのミスが目立つ等苦しい時間帯を迎えた。しかし、後半 19 分過ぎに吉岡の連続速攻が決まると、八田の速攻、中村のカットインなどで 5 連取、最後は行本のポストシュートが決まり、最終的に 32 対 20 で勝利、3 位で大会を終えた。この大会での経験を活かし世界ユース選手権大会に繋げていきたい。

2016 年 U-22 東アジア選手権帯同実施報告

帯同医師　田村　格（自衛隊中央病院感染症内科）

今回縁があり、初めて代表チームの遠征帯同をさせていただきました。その経験を通して医師として感じたことをここに報告させていただきます。

本大会は U-22 が参加条件の大会でしたが、今回はチームの強化、経験の蓄積を兼ねて男子は U-19 で、女子は U-18 で参加することになりました。アンダーカテゴリーにおいては試合に勝つことのみが目的ではなく、有望選手をいかに上の世代へと繋げ育てていくかという視点も重要になります。加えて今回の大会はそもそもがチーム強化過程の遠征であったため、より育成という視点が重要な大会参加であったかと思います。

大会は中国の蘇州において開催されました。当初は蘇州市体育館（2009 年世界女子ハンドボール選手権グループリーグ会場）で開催の予定と聞いていましたが、現地に到着したところで、蘇州独墅湖体育館での開催に変更されたと聞かされました。日本では起こりえない事態が起こるのが海外遠征の醍醐味でもあるかもしれません。

滞在は蘇州金陵観園国際酒店というホテルで、5 つ星とされていました。施設は比較的新しく清潔であったものの、英語が通じる従業員が非常に少ない、衛生面に懸念の残ることが目につくなど、サービス面は現在の中国という国を表しているレベルでした。旅行会社によれば通常日本人の使用はほとんどないホテルとのことでした。

ホテルの食事は全てビュッフェ形式で中華料理を中心に洋食もあり、日本風の味噌汁が供されることもあるなど、比較的バラエティに富んだ内容で、スタッフ選手とも最低限の栄養摂取は実施出来ました。それでも 1 週間以上の滞在となれば似たような食事内容の繰り返しに飽きがくると訴える選手もおり、食の嗜好は個人差が大きいということもあり、やはり食事に対する準備は常に慎重に考えておいた方がよいと思わされました。

滞在中の天候は連日高い湿度と猛暑で、晴れの日には外気温は

40℃を超える状況でした。蘇州でもPM2.5が問題にはなっているようでしたが、この季節は一時青空が見られることもあり、大気汚染はさほど気にはなりませんでした。

大会の成績は男子は１勝２敗１引き分け、女子は１勝２敗でいずれも３位という結果でしたが、海外遠征自体が初めてという選手もいる中で、上の年代のチーム相手に貴重な経験が積めたものと思います。この大会のあとに続く男子のユースアジア選手権、女子のユース世界選手権に向けての非常に良い予行演習となり、結果がとても楽しみです。

日本代表選手の目的はフル代表においてはその競技の世界の頂点を目指すことです。オリンピックや世界選手権のような世界最高レベルの大会において十分なパフォーマンスを発揮するためには、そこに至るまでの十分な準備に加えて大会期間中にコンディションを最高の状態に維持することが求められます。そのためには身体のコンディションとメンタルのコンディションの両方を高め維持することが必要です。わが国においても近年ようやく選手の体調と競技力維持のためにはその道に通じたメディカルスタッフによるサポートが必要不可欠という認識が共有されるようになってきました。また特に海外の大会においてはいわゆるアンチドーピングを含めたスポーツ医学に加え、感染症、時差、航空機移動の影響、宿舎環境、食生活、メンタルコーチング、など、選手の体調維持や健康管理に関する全てについてメディカルスタッフを積極的に活用しなければならない時代となりました。このような中で海外遠征時の帯同医師はもちろん、日本のハンドボール競技強化について日常から医科学スタッフが働きかけるべきポイントは多岐にわたるにもかかわらず、現状はまだまだ手つかずなことも多く、言い換えれば日本のハンドボールが強くなるための医科学的「のびしろ」はまだまだ多いと感じます。

海外遠征における選手の発熱、咽頭痛、咳、下痢といった症状は思いのほか多いにも関わらず、清潔の保持や風邪予防、食中毒予防や虫刺され予防など適切な予防策が講じられていないことは多く、今大会においても選手達にまずは食事前の手洗い実施から指導する必要がありました。一見直接競技とは関係のないように見えるところからコンディション維持は始まります。基礎工事をおろそかにして高いビルは建ちません。ならば手を洗えば良いのだろう？ということではありません。日常生活のひとつひとつ、時間や環境のトラブルも珍しくない海外遠征先での生活のひとつひとつにどれほど気を使えるか、が良いコンディションを作り、最高のパフォーマンスに繋がる大きな要素となります。幸い若い年代の選手達はまだ「聞く耳」を持っています。この時期に将来世界で活躍するハンドボール選手としての基礎工事がしっかり出来るように今後も力添えが出来れば良いのだろうと感じました。

一緒に大会に参加した男女両チームの監督、コーチ、トレーナーの皆さんの選手達への親身かつ年代と性別の特性をふまえた指導には感嘆しました。召集からの非常に限られた時間でチームを作り、かつ将来に向けた指導もし、ハンドボール以外のところでの振る舞いも指導する手腕は本当に素晴らしいの一言です。これに選手の立場からの継続性を持たせることが出来れば必ず日本のハンドボールはもっと強くなると思いました。

体格と高さで劣る日本のチームがコンタクトスポーツであるハンドボールで海外のチームと戦うには、瞬発力でスピードに乗って相手と当たり、当たった後の次の一歩をすかさず動ける俊敏さとそれを試合の最後まで維持するスタミナをストロングポイントにするしかないのは素人が考えてもわかる話で、それを身につけるためには簡単に言えばブレない体幹を作りながらサーキットトレーニングと筋力トレーニングを時間をかけてバランスよく積み上げていくしかありません。医学的には高校を卒業するあたりの年齢からこれらのトレーニングを本格化していくのが良いと考えられます。戦術的にも当然個人の能力に頼らない統率の取れたディフェンス・オフェンスが必要になり、それを得るにはチームとしての連係練習を繰り返すしかないでしょう。準備期間の短い代表チームではどうしても限界があり、それぞれの選手が自チームに帰ったあとはまた違った手法でトレーニングをし、連係の相手も方法も変わってしまう。選手によっては大学進学や社会人になるにあたってまた球拾いから始めなければならない。学校スポーツとして進化してきた日本のハンドボールにはそのメリットとデメリットがありますが、デメリットの面をいかに修正していけるのかが今後日本のハンドボールが強くなるための大きな課題かもしれない、などとも考えました。

海外遠征帯同医師の仕事は選手やスタッフが身体を痛めた、現地で病気になった、という時にだけ対応するものではありません。大会会場や現地についての事前調査に始まり、選手の健康情報の収集（ドーピング対応も含めて）、適切な医薬品・医療資器材の準備、必要なワクチン接種、時差対策、長時間移動対策、海外傷害保険の確認、滞在宿舎と環境の確認、内科的疾患を中心とした疾病予防と健康管理、女子選手の生理のコントロール、現地での大会期間中の栄養管理、メンタルサポート（試合に臨むにあたってのメンタルコーチングまで）などなど、やらねばならないことは多くあります。また競技由来の慢性あるいは亜急性の身体のダメージや筋骨格系の痛みなどに対して、鎮痛薬内服やブロック注射などをどこまで実施して試合に出場させるべきなのかは、痛みの部位や程度はもとより選手の年齢や試合の位置づけ、本人の希望など勘案すべき因子は多く、ひとつひとつの例に個別に対応する必要があります。今回のように18歳、19歳以下の選手の場合には、たとえば関節の痛みが出た場合には部位はどこであれ選手の将来を考えれば基本的には遠征中の試合練習への参加は中止とするのが妥当でしょうが、場合によっては選手生命を縮めるかもしれないリスクを冒してまで選手を出場させるべきか否かは悩ましいことも多々あります。そういった判断についても年代別にも経験を蓄積し、今後に生かしていくことが大事かと思われました。

今回は非常に貴重な機会をいただきました。これからは許されるなら他のカテゴリーも含めた代表チームとも関わっていき、今後も協会医事委員として日本のハンドボール強化に少しでも力添えができるように頑張りたいと思います。



第20回 女子ジュニア世界選手権

20th Women's Junior Handball World Championship

大会期間：2016年7月3日(日)－7月15日(金)
開催都市：ロシア・モスクワ

最終順位

優勝：デンマーク	13位：フランス
2位：ロシア	14位：アンゴラ
3位：ルーマニア	15位：**日本**
4位：ドイツ	16位：アルゼンチン
5位：ノルウェー	17位：モンテネグロ
6位：スウェーデン	18位：中国
7位：韓国	19位：オーストリア
8位：クロアチア	20位：エジプト
9位：オランダ	21位：チュニジア
10位：ハンガリー	22位：チリ
11位：ブラジル	23位：カザフスタン
12位：スペイン	24位：ウズベキスタン

選手団名簿

役職	名前	所属
監督	辻 昇一	(公財)日本ハンドボール協会 日本体育大学
コーチ	岡本 大	(公財)日本ハンドボール協会 桐蔭横浜大学
ドクター	大西 信三	(公財)日本ハンドボール協会 筑波大学附属病院
トレーナー	岩谷 美菜子	(公財)日本ハンドボール協会 ながい接骨院
情報分析	嘉数 陽介	(公財)日本ハンドボール協会

	名前	所属	出身校
1	藤田 明日香	ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング	四天王寺高校
2	三橋 未来	東京女子体育大学	佼成学園女子高校
3	高杉 桃加	オムロン	岩国商業高校
4	河原畑 祐子	筑波大学	佼成学園女子高校
5	和田 涼夏	日本体育大学	宮崎学園高校
6	中野 智佳	東海大学	小松市立高校
7	渡辺 樹	桐蔭横浜大学	昭和学院高校
8	斗米 菜月	東京女子体育大学	佼成学園女子高校
9	佐々木 花江	日本体育大学	横浜市立南高校
10	伊地知 美姫	オムロン	鹿児島南高校
11	登川 愛	筑波大学	コザ高校
12	山口 絵梨香	北國銀行	神戸星城高校
13	眞方 彩帆	東海大学	埼玉栄高校
14	神谷 怜名	日本体育大学	名経大市邨高校
15	澤井 咲良	オムロン	福岡女子商業高校
16	青 麗子	筑波大学	白梅学園高校
17	大沢 アビ直美	早稲田大学	佼成学園女子高校
18	渡部 真綾	東海大学	小松市立高校

参加報告 U-20女子日本代表監督 辻　昇一

今回、U-20女子日本代表が第20回女子ジュニア世界選手権で戦うことに際しまして、日本ハンドボール協会、各選手所属チーム関係者の皆様、株式会社JTB様、及び各方面から様々なご支援を戴きました多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

私達、U-20女子日本代表は、「世界選手権ベスト8」と「2019年世界選手権と2020東京オリンピックに向けての選手の育成」の二本柱の使命を掲げ、今大会に向けて準備していきました。

選手選考に関しましては、各カテゴリーの国際大会と国内スケジュールの関係を考慮しながら候補選手22名を選出し、5月27日から29日の第1回強化合宿の中で選手選考を行いました。怪我による辞退の選手が2名おり、20名の中での選考となりました。その後、昨年のアジアジュニア選手権を戦った選手を中心とした大会参加の18名を選出致しました。選手を派遣してくださった各所属チームの関係者の方々には、ご理解とご協力頂いたことに感謝申し上げます。

大会への準備としては、スケジュール調整と合宿場所の確保が難しく、また6月の韓国での日韓戦にジュニアから4名が選出され、合宿に参加できないこともあり、非常に短い準備期間でありましたが、時間を有効に使い簡単な戦術を落とし込みました。その中で、今回から参加して頂いた岡本大コーチ（桐蔭横浜大学監督）が、大型選手に対する攻撃戦術を丁寧にチームに落とし込んでくれました。この考え方が本大会では有効に働いたと考えています。また、昨年同様に、選手達には日本代表として戦う姿勢の他に、「主体性を持とう」、「能動的に動こう」、「コミュニケーションとろう」、そして、「Positive Mental Attitude（積極的心構え）」といった行動や振る舞いをお願いしました。

出発前には女子日本代表チームとU-16男子代表チームにご協力を頂き、実戦トレーニングをご一緒させて頂いたことは、チーム強化にとって大きなプラスとなりました。

また、ロシアでの食の不安も鑑み、岩谷トレーナーらが中心となってお米25キロ、炊飯器2台、レトルト食品等の日本食を持参し、コンディション維持のための準備も行いました。

時差調整の意味もあり6月29日に大会現地に入りました。初夏のロシアは気候が良く、気温・湿度共に過ごしやすく、体調管理に関しては問題ありませんでした。大会運営は細かいところまで気遣いが行き届いており、また日本チームに帯同してくれた通訳のIrene Alexanderは非常に優秀な女性で、空手の現役ロシア代表選手で日本文化にも理解があり、様々な事案において解決策を丁寧に模索してくれて、海外経験豊富な岡本コーチと共に、交渉事を有利に進めて頂いたお蔭で様々なトラブルを回避することができました。

滞在場所は、モスクワ市郊外のモスクワ川沿いの新興街の



中にあり、巨大ショッピングモールが隣接したaquarium hotelでした。ホテルの中にはハンドボールが行うことができるコートが3面あり、練習会場もホテルの中という環境で、選手はストレスなく過ごすことができました。7月1日には到着した国の中からいくつかの国に交渉して、CSKA MOSCOW体育館でアルゼンチンと練習マッチを行うことができました。大会前に海外の選手と対戦することで、初戦の中国戦に向けて良い準備をすることができました。練習マッチの中で相手のパワーと重さに面食らったことが、チームとして戒めとなりました。

今大会に戦うにあたり、初戦の中国戦と次のチリ戦をしっかり勝つことが非常に重要と考えていました。昨年のアジアジュニア選手権でも中国戦は終盤までもつれ込み、点差以上に苦戦していました。大会前の情報では、中国はアジア予選から6名の選手を入れ替え、戦力強化をして臨んでくることが予想されました。岡本コーチとは、この2戦を落としたら日本に帰れないぞ、と話をしておりました。

様々な準備が功を奏したのか、初戦の中国戦は試合開始からDFからの速攻が上手く機能し、前半からリードを保ち試合を進めることができました。中国は予想通り、アジア選手権からメンバーが変わっており、攻撃面において昨年より洗練されていました。日本はDFでのマークミスが多く発生しましたが、センターDFに入った渡辺樹が上手くフォローに入って、被害を最小限に食い止めてくれました。両サイドに入った眞方、藤田が速攻とセットの両面でシュートを高確率で決めて、優位に試合を進めることができ28対23で勝利しました。なお、中国は、日本戦の後に調子を上げており、ヨーロッパ勢に果敢に挑んでいました。今後の成長が見込まれる大型選手も多く、警戒が必要であると感じております。

2戦目のチリは世界選手権初出場ということでした。日本は終始リードを保ちながら39対21で勝利することができました。しかしながら、この試合の開始2分で、国際大会初出場ながらDFの柱とPVとして活躍していた渡辺樹が膝を負傷し、以降の試合に出場することができなくなってしまい、今後の戦いに向けて攻守両面で再構築をしなければならない状況となりました。

3戦目はスウェーデン戦でした。昨年のヨーロッパ選手権で3位となった実力があり、伝統のスカンジナビア6-0DFの完成度が高く、そこからの速攻が武器のチームであります。国としてのハンドボール哲学が浸透しており、フル代表とジュニアの戦術が同様に行われていると感じます。日本は、岡本コーチの攻撃戦術に理解が深まってきた選手達が、ポストやカットインを狙い続け、前半は10対11と粘りました。後半残り10分まで16対19と食い下がっていましたが、狭いサイドシュートとロングシュートを打たされ、スウェーデンの速攻を許す形となってしまい、18対26で敗戦となりました。

4戦目は地元ロシアでした。今大会はロシアのためのロシアの大会の様相が強く打ち出されており、盤石の布陣でありました。強力なCBと左右の長身BPとPV、そしてテクニックのあるサイド陣で、多角度から打ち込まれました。日本は4-2DFなどあらゆる手を尽くしましたが、打開策が見つからないまま試合が進んでしまい、GK大沢とLW眞方が孤軍奮闘しましたが、23対43と大敗を喫してしまいました。そして、これまで好調を維持していた眞方が左膝を負傷し、今大会の出場ができなくなってしまいました。渡辺樹に続いての負傷で大きな痛手となりました。

予選リーグ最終の5戦目はオランダとの対戦でした。オランダは様々な戦術を駆使して戦っており、育成段階から国としての方向性が感じられるチームであります。私がオランダの攻撃を見誤ったところがあり、前半はオランダにポストシュートを数多く決められてしまう展開となっていまい、10対17で折り返します。後半はその部分を修正し、攻撃陣はBP河原畑、渡部、斗米、山口とPV青の連携の中での得点が増え、15対14と盛り返しましたが、結果25対31と悔しい敗戦となりました。

予選リーグ2勝3敗のD組4位で、決勝トーナメント進出となりC組1位のルーマニアとの対戦となりました。ルーマニアは、2年前の女子ユース世界選手権のチャンピオンであります。目標とする世界ベスト8に進むために、分析の嘉数さんとルーマニア戦の戦い方を考える中で、ルーマニアのエースLASLO Cristinaを徹底的に抑える作戦に出ました。シュートも強力で、セット、速攻においてアシストに優れるCBです。この世代きってのプレーヤーに対して、まとわりつくDFが得意な三橋をつけて、ルーマニアのペースを乱すことを狙いとして戦いを挑みました。

試合は、ルーマニアがペースでしたが、日本も粘ってつ

いていきました。日本の5＋1DFに苦慮する場面も見られ、GK大沢を中心にDFも踏ん張りました。前半は13対16で折り返します。後半は攻撃陣が奮闘するも、DFが1対1で負ける場面があり、最大6点差がつきましたが、GK中野の7mTセーブで流れを引き戻し、最後まで5＋1DFを継続しました。ルーマニアも7人攻撃などを繰り出しましたが、上手く切り抜け、藤田、三橋の速攻、山口のサイドで残り5分で1点リードしました。しかし、残り1分でDFを割られて30対31、残り40秒で藤田から河原畑へのスカイが決まり31対31としましたが、残り3秒で押し込まれたカットインで失点し、31対32で悔しい敗戦となり、ベスト8入り叶いませんでした。

予選リーグの結果から15-16位決定戦にまわった最終戦は、アルゼンチンと戦いました。ベンチ全員が出場し、苦しい場面もありましたが、伊地知、高杉などがDFで踏ん張り、登川、澤井ものびのびとプレーし28対24で勝利、最終結果は15位となりました。

大会期間中、スタッフ陣はそれぞれの専門をこなす中で、多方面に渡る知識をチームのために還元して頂きました。ドクターの大西信三先生は、膝の怪我を負ってしまった選手の対応をしながら、通訳、コーディネーター、写真記録などを積極的に行って頂き、ルーマニア戦の前は、仮想LASLO Cristinaとなって練習相手にもなって頂きました。トレーナーの岩谷美菜子さんは、女性スタッフ一人ということもあり大変だったと思いますが、時には厳しく、時には諭すように、様々な部分で選手の相談役として心身両面の細やかなサポートやケアを深夜まで行って頂きました。分析の嘉数陽介さんは、代表チームでの活動経験を活かし、いろんな情報を還元して頂きました。ゲームを観る眼に長け、独学の英語を駆使してロシアやフランスの分析班との情報交換をはかるなど、フットワークの良さと人懐こい性格でチームの潤滑油としても活躍して頂きました。岡本コーチは、様々な視点で選手、チームを観て頂き、独自の攻撃戦術をチームに落とし込んで頂きました。大型チームを相手にした攻撃の考え方は、今大会非常に有効であったと思います。また、チームビルディングの術に長け、チームが一つなるために、選手が成長するために、多くの仕掛けをして頂きました。ハンドボールだけに留まらない岡本コーチの経験や見地から沢山お話して頂き、選手の気づきを促してくれました。スタッフの献身的な働きに感謝申し上げる次第です。

選手達は、これから上のカテゴリーで世界と戦うことになります。日本が世界で戦うために、そして、日本でのビックイベントにおいて臆せず自分を表現するためには、技術的に優れた選手がタフにならなければならないと考えます。この経験を糧として、世界の中で活躍して欲しいと思います。

怪我をしてしまった渡辺樹選手、眞方彩帆選手の一日も早い復帰を心より願っております。

女子ジュニア世界選手権を戦うに際し、ご支援とご協力戴きました多くの方々、誠にありがとうございました。

参加報告 U-20女子日本代表キャプテン 河原畑 祐子

まず初めに多大なるご声援とご支援をいただきまして、本当にありがとうございました。第20回を迎えたジュニアの世界選手権はロシアのモスクワで行われ、時差もかなりある中、日本の皆さんが私達と一緒に戦ってくださった事が何よりも自分たちの励みになりました。ありがとうございました。

私達日本チームはDグループに入り、開催国であるロシア、オランダ、スウェーデン、チリ、中国と予選リーグを戦いました。この大会に入る前、決勝トーナメントに進出するためには最初の二戦である、中国、チリには必ず勝たなければならないと互いに喝を入れ合いながら臨みました。結果は、中国とは28対23、チリとは39対21と、確実に勝利を収めることができました。スウェーデン戦は18対26という結果で、前半は粘ったものの後半に差をつけられてしまいました。ロシアとの試合では、自分達の思い描いてきたプレーができず、23対43の20点差という大敗を喫してしまいました。この敗北は、私たち選手にとって大きな刺激となり、この日を境に小さな変化が起きてチームが一つにまとまっていくのを実感しました。そして臨んだオランダ戦では、21対35と6点差がついてしまったものの、内容的にはクイックスタート、速攻を重視したゲーム展開ができ、日本人の小ささを活かして背の高いヨーロッパ人の嫌がるDFができ始めた試合だったと思います。

リーグ戦を4位で通過し、決勝トーナメント1回戦は、優勝候補でもあったルーマニアとの試合でした。最後勝ち越しを許してしまい、31対32で惜敗という結果でした。この試合では、スタッフの提示する事や選手内での約束事などが出し切れたと思います。勝てる試合で勝ちきれなかった甘さや、前半から蓄積されていく一つのミスが最後にどれだけ大きな影響を与えるのかを学んだ試合でした。しかし、ルーマニア相手に30点越えの試合をしたのも日本だけという所に関しては、速攻がどれだけ効果的か証明できたと思います。

順位決定戦ではテストマッチもしたアルゼンチンとの試合で28対24と勝利することができ、結果は15位でしたが終始日本のペースで試合運びができたと思います。今大会はチームの軸でもあった2人が試合に出ることが困難な状況になり、チームが不安に包まれそうなところを、2人がサポートの立場に回ってチームの軸として支えてくれました。様々な試練があった2週間でしたが、得たものはかなり大きかったと思います。ベスト8という壁を超えられなかった悔しさを忘れず、さらなる精進をして行きたいと思います。

最後になりましたが、多くの方々に支えられ、何不自由なく試合に臨むことができました。この環境を当たり前だと思わず、チームに帰っても未来を見据えたハンドボールをしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

帯■同■報■告■

分析　嘉数 陽介

このたび、女子ジュニア日本代表チームの一員として、世界選手権に帯同させていただいたことに感謝を申し上げますとともに、大会報告をさせて頂きます。

今回の戦いは、まず予選リーグ突破の絶対条件として最初の２戦（中国、チリ）に勝利することが必須でした。狙い通りに連勝スタートを切れたことで、ベスト16入りは果たしましたが、エイトファイナルで敗戦し、ベスト８の目標達成は叶いませんでした。しかしながら、２年前のユース世界選手権で銀メダルを獲得したロシア、同じく銅メダルを獲得したスウェーデン、さらには昨年シニア世界選手権で銀メダルを獲得し“オレンジプラン”で話題となったオランダが予選リーグで同組にいたことで、選手にとって非常に貴重な試合経験になったことは間違いありません。情報班としても、各強豪国の情報収集において重要な大会となりました。また、エイトファイナルでは、今大会銅メダルを獲得したルーマニアに１点差で惜敗し涙を飲みましたが、世界上位のチームに対してあと一歩に迫る戦いができること、同時にその１点をひっくり返す困難さと自分達に足りないものを選手・スタッフ共々痛感致しました。

「量的データから見る課題と今後の方向性」

今大会の公式データから、日本のシュート内訳をグラフ化すると、Field Shot を最も多く打たされており、その得点数は最も低いことに加え、Line Shot の本数が上位国と比べて少ないことが分かります（図１、２）。このグラフには、ライン際からのシュートを排除されて、距離の

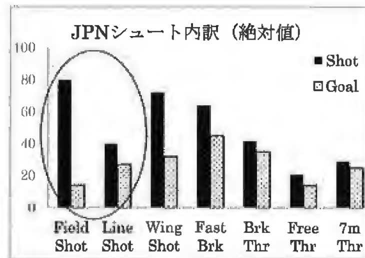


図１　JPN シュート種別の内訳（絶対値）

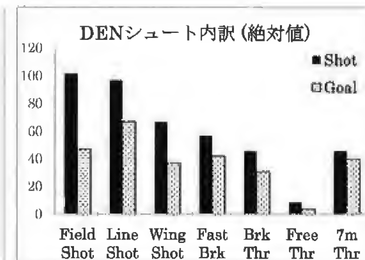


図２　DEN シュート種別内訳（絶対値）

あるロング、ミドルシュート等を打たされたことが示されています。そしてこの傾向は、シニアの女子日本代表が示すものと同じであり、特に日韓戦では日本を知り尽くした韓国がこのような防御戦略でライン際を固めてきます。

Field Shot をさらに細かく分析するため、各シュートの結果の詳細に注目すると、日本が放った Field Shot 80 本のうち、21 本が相手 DF にブロックされていることが示されています。また、枠外へのシュートも計 18 本が記録されています。（表1）

これらのデータから、日本の攻撃において示されている課題の Field Shot は、その多くが相手 DF の枝に当たっていること、またそれをかわすために放ったシュートの多くが枠外に飛んでいることが示されています。そしてこの課題は、シニア代表にも言えることであり、今後の解決策が求められると思います。

今後の方向性として、違うエリアからのシュートチャンス増大に注力するか、ロング、ミドルシュートにおいて、ズレた位置取り、タイミングのバリエーション、投げの技術向上により、そのものの精度を上げることに注力するか、戦略、戦術としては多岐にわたると思います。その時にチームで選択した戦い方を全員が信じてやることが、現場において最善だと考えます。

長期的対策として、育成年代において共通して大切だと言えることは、全てのベースとなる考え、技術、フィジカルを、育成システムのなかで計画的に大きく作っておくことであり、ロングシュートひとつにしても、判断、打てる力、打ち分ける技術などのベース作りがさらに必要になると思います。将来様々な代表監督のもとで様々な相手と対峙し、多様な戦術に対応するには、基礎を固めておくことが必須になり、その上で個々の強みを発揮することでより強く、崩れない、個性のあるチームに近づくのではないかと考えます。これは決して容易な課題ではなく、莫大なチャレンジだと理解しておりますが、このような特別な場所でチームの一員として関わらせていただいていることに感謝し、少しでも結果に貢献できるよう、私もできることを頑張ろうと思います。

最後に、コートで身体を張った選手達には心より敬意を表したいと思います。本当にお疲れ様でした。

表１　日本の各シュート率と結果の詳細

TEAM TOTALS	GOALS	SAVED	MISSED	POST	BLOCKED	TOTAL	%
Field Shot	14	27	13	5	21	80	17.5%
Line Shot	27	7	2	3	1	40	67.5%
Side Shot	32	27	4	9		72	44.4%
Fastbreak	45	15	2	2		64	70.3%
Breakthrough	35	4	1	2		42	83.3%
Free Throw	14	5	2			21	66.7%
7M-Throw	25	3	1			29	86.2%

戦評

■7月3日（日）：予選グループ

日本　28（15-12、13-11）23　中国

初戦中国に先制されるも、渡辺（樹）のリバウンドゴールですぐに追いつき、その後眞方・藤田らの連続速攻で4対1とリードしてゲームをスタート成功。180㎝オーバーのプレーヤーを複数名要する中国の高さに慣れず6対4と追われるも、藤田、河原畑のカットインで9対4とリード。中国たまらずタイムアウトもGK中野や大沢の7mTセーブで流れを渡さず、全員で粘りのDFから速攻の展開で21分まで12対8とリードをキープ。前半終盤長身ポストに苦しみ（前半でポストに5失点）ながらも15対12とリードして前半を終えた。

後半も渡辺（樹）が体を張ったDFでリズムを作り、藤田、高杉の速攻で18対13とリード。その後攻めあぐみ始めたOFの中、河原畑のスカイプレーや渡辺（樹）のポストプレーによる中国退場7mT獲得、斗米の鋭いカットイン、さらには青のスーパーロングなどで43分過ぎまで22対17とリードをキープしてゲームが進んだ。しかしここから体格差に対抗し続けた疲労から運動量が減り、中国に勢いを持っていかれ53分22対23と1点差まで詰め寄られる。大変苦しい展開の中、河原畑の連続カットインで25対23、眞方、青の速攻で駄目押しし27対22（55分）、大事な初戦を勝利した。守備においてGK大沢、DF渡辺（樹）が終始重要な仕事をし、両サイド陣藤田、眞方が大活躍。そしてキャプテン河原畑がゲーム全体を良くまとめ上げた勝利であった。

■7月4日（月）：予選グループ

日本　39（18-8、21-13）21　チリ

立ち上がり固さが見られ凡ミスが続き、さらに開始2分DFの要渡辺（樹）が負傷退場になり、重い雰囲気の序盤となってしまう。オフェンスではチリのDFの広いスペースを利用し、またDFではGK大沢のファインセーブから眞方、藤田の速攻でなんとか6対2（10分）とリードしていく。しかしここからチリのアタックDFに足が止まり上手く攻撃ができない時間が続く。DFでもチリのエースサウスポーの力強いアタックに対応できず15分7対5と詰められたところで日本タイムアウト。落ち着きを取り戻した日本は斗米のコントロールから伊地知、眞方らが加点し12対7とリードを広げた（20分）。焦りだしたチリをDFでミスを誘い、一気に速攻展開に持ち込み、伊地知や藤田らが次々に得点、15対8とさらにリードを広げた（26分）。終盤もGK神谷のセーブから眞方の速攻、三橋の速攻と手を緩めることなく加点し18対8と大量リードで前半を終えることが出来た。

後半も序盤からDFで優位に立ち、そこから速攻で藤田、眞方、青ら4連続得点で22対8（34分）と最高の展開。その後も勢いを止めることなく、河原畑、山口のカットインで加点し37分24対11と危なげない展開とする。最後まで全員で集中し、GK中野から和田への速攻。渡部（真綾）の力強いプレーも飛び出し、最後も高杉のゴールでしっかり締めくくった。

■7月6日（水）：予選グループ

日本　18（10-11、8-15）26　スウェーデン

藤田の速攻で先制するも、非常に身長の高いSWEのDFに対し、慎重に考え過ぎ上手く機能できないオフェンスの序盤となってしまう。またDFでも大きさに押し込まれ7mTや退場とされてしまう（10分4対4）。10分を越えたあたりからSWEオフェンスに徐々に慣れ出した日本DFは、牽制など運動量も増加しDFから藤田の速攻と狙いの展開となる6対4（13分）。その後もDFでは粘るも、オフェンスでの動きが悪く連動した攻撃ができず、高さのある6-0DFを攻めあぐみ逆速攻展開とされてしまう。なんとかGK大沢が速攻ノーマークをセーブするなどでしのぐが21分8対8とされたところでタイムアウト。斗米をセンターに配置し、オフェンス全体が動き出し、河原畑・山口のカットインで10対11と1点差で前半終了。

後半に入ってもオフェンスの攻め手が無く、逆速攻で3連取されてしまう。それでも山口や河原畑の個人技で追いすがり（12対15：36分）、いよいよ40分過ぎ日本がペースを握る。河原畑、青、山口が得点、続いて高杉の速攻も飛び出し16対17と反撃開始。さらにはSWE退場でチャンスとなるも攻撃が単調となり単発となるケースが増加してしまう。数的優位も利用できず、逆速攻展開となり、45分過ぎから10分間得点できず、その間にSWEにロングシュートとポストの2対2で確実に得点を積み重ねられた。大型GKの攻略も課題となった試合となった。

■7月7日（木）：予選グループ

日本　23（9-18、14-25）43　ロシア

優勝候補地元ロシアとの一戦は、序盤ワイドに展開するオフェンスで狙い通り、間のスペースを広げ、斗米のカットインやサイドへのずらしが有効に機能した。眞方の速攻も飛び出し開始7分3対3と互角の立ち上がりを見せた。しかしここから日本オフェンスが淡泊になり、逆速攻で4連続失点となってしまった。その後もロシアの力強い速攻を守り切れず、16分4対12とされてしまった。OFではアウトにずらすのが精一杯で、眞方がサイドから良くゴールするも点差は詰められず、9対18と大量リードされてしまった。

後半に入り、4-2DFシステムを試行するも、ロシアの大きな揺さぶりとポストプレーで確実に攻略されてしまい、開始早々3連取されて9対21となってしまった。35分過ぎ藤田のサイドやカットインで反撃しようとするも、逆速攻・ロング・ポスト・サイドとすべてにおいて優位にたたれ失点を重ねた。また44分すぎにこの試合までずっと好調をキープし、全試合スターティングメンバーとして活躍してきた眞方が、速攻で得点をとるも負傷退場となり、日本チームとしては大きな痛手となった。DFではGK大沢が孤軍奮闘しスーパーセーブを重ね、オフェンスでは手渡しプレー等のコンビにより有効に攻略するも、それもコンスタントに出せなかった。シュートも長身GKをかわせず、終盤に三橋や渡部のスピードプレーで一矢報いるも23対43で完敗。

■7月9日（土）：予選グループ

日本　25（10-17、15-14）31　オランダ

試合開始直後から試合への強い想いが空回りし、OFにおいてイージーなキャッチミスやシュートミスを多発し、逆速攻などで6分いきなり0対4ビハインドのスタートとなってしまう。8分過ぎに青の速攻でやっとファーストゴールを決めるも、オランダの低いラインの6-0DFシステムに対し、連動したオフェンスができず、個々がバラバラとなってしまう。青が速攻やポストで得た7mTを決め11分4対8とするも、徐々にポストプレーでDFが崩され、18分過ぎ7

対13と点差を広げられる。渡部のロング（22分）や斗米のカットイン（27分）などで粘るも、10対17と攻略できずリードされてしまった。

後半に入りオフェンスがやっとリズムが良くなり、オフェンスが連動しだし、河原畑・斗米のカットインで得点（33分：13対19）。続いてGK大沢のファインセーブから速攻展開となり、青や斗米で加点し、37分16対21と詰め寄る。さらに流れを離さない日本は、速攻で高杉のアシストから伊地知のポストや山口のカットインで18対21と一気にオランダを捉えにかかった。もう一追いというところであったが、オランダもタイムアウトで態勢を立て直し、44分19対25と再び点差を離されてしまう。52分22対30と勝利は厳しくなったが、それでも河原畑を中心に最後まで諦めず、山口や渡部のロングなどで56分25対30と意地をみせる。最終25対31のスコアでオランダに敗戦。この結果予選ラウンドDグループ4位で決勝トーナメント進出となった。

■7月11日（月）：準々決勝

日本　31（13-16、18-16）32　ルーマニア

いよいよ決勝トーナメント。Cグループ1位のルーマニアとの決戦。試合前ミーティングで辻監督の激によりチーム一丸となって臨んだ日本は、開始直後からOFで全員が良く連動し、狙いとしていたポストプレーで青が連続得点を決める。DFからの速攻も繰り出し藤田のゴールで開始5分3対3とハイペースの試合となった。ルーマニアに先制されていくも、ルーマニアオフェンスに対し日本の5-1DFシステムが機能し、開始10分間完全に日本ペースの内容であった。内容は良かったがシュートミスなどでチャンスを逃し10分3対7と離されたところでタイムアウト。ルーマニアエース13番にマンツー気味にアタックするシステムを再確認。DFで運動量がルーマニアを上回り、逆速攻で藤田、渡部のロングでしぶとくついていく（15分：6対11）。15分過ぎからさらに日本は加速し、青のポスト、藤田の速攻などで21分11対13と追撃。ルーマニアたまらずタイムアウト。その後もGK大沢が安定したキーピングを見せ、一進一退の展開が続く中、25分まで5得点と活躍の青が負傷退場となってしまう。しかしOFで斗米と山口が良く連動し粘り強く13対16で喰らいついて前半終了。

後半に入っても日本のチームの動きは良く、34分14対17でルーマニア退場のチャンスもパスミス・キャッチミスで逆に点差を広げられてしまった（38分：15対21）。斗米のカットインや青のポストで得点するも力のあるルーマニアのOFに徐々に押し込まれ41分14対20。誰もがやはり敗戦との雰囲気となる中、ここから日本チームだけは諦めない。三橋を中心とした運動量のあるDFでルーマニアに得点を許さず、藤田のサイド、河原畑の速攻、青のポストで42分21対24と追撃。さらに日本チーム退場7mTのピンチも46分GK中野がビッグセーブで流れを引き寄せ、ここから7分間で河原畑・斗米のカットインなどで猛攻。53分三橋の強気の速攻で27対27と遂に同点。懸命のDFで失点をされず、山口のサイドで55分28対27逆転に成功する。ルーマニアをぎりぎりまで追い詰めるが、強引なカットインに押し切られ7mTなどで残り1分30対31再逆転されてしまう。残り42秒タイムアウト。最後の攻撃となった日本が選択したのはチームプレー。スペクタクルなスカイプレーをキャプテン河原畑が決め、残り18秒で奇跡の同点とする。しかしルーマニアの最後の捨身の攻撃に残り3秒ゴールを奪われジャイアントキリングならず。31対32、一点差の大変悔しい敗戦となった。

■7月12日（火）：9-16位決定戦

日本　28（15-14、13-10）24　アルゼンチン

アルゼンチンとの一戦は序盤日本の動きが悪く、0対2ビハインドスタートとされてしまう。前半2分すかさず三橋を上げるアタックDFに切り替えるも、広くなったスペースを強く押し込まれ7mTが増えてしまう。嫌な流れをGK中野が7mTを、GK大沢がノーマーク速攻をセーブし救う（4分）。それでもオフェンス・DF共に足が全く動かず、9分2対6とされたところでタイムアウト。4-2DFシステムを導入しリズムをつかもうとしたが、アルゼンチンオフェンスをファウルできず継続されポスト、カットインと思うように打開されてしまう。13分過ぎやっと三橋の速攻が出るも、DFがポスト中心にやられて19分7対13と大量リードされてしまう。20分過ぎにやっとDFがアルゼンチンの強引なプレーに慣れ出し、渡部のシャープなロングから始まり、速攻で三橋、藤田、佐々木と連取に成功、24分13対13と一気に追いつく。その後も我慢の展開となり、斗米のミドル、伊地知の速攻で15対14の1点リードで前半を終えた。

後半序盤GK大沢がナイスセーブ連発でアルゼンチンにペースを渡さず高杉のカットから速攻で35分17対15。セットオフェンスではクロス攻撃が機能し、渡部のロングで18対15。その後もGK大沢を中心にDFで踏ん張り、10分間1失点に抑え40分20対15とリードを広げた。ここで勝負をつけるチャンスであったが、速攻での自分たちのミスで勝負所を逃し続け、アルゼンチンに粘られてしまう（45分：17対20）。46分過ぎからやっとまたリズムをつかみ、三橋や藤田のサイドで49分23対17とセーフティーリード確保に成功する。時間をコントロールしながら河原畑、青が加点し、最後は登川の速攻でだめ押し、28対24で最終戦を勝利で終えた。

第36回 全国クラブハンドボール選手権大会 西地区大会

【最終順位】

■男子
優勝：フレッサ福岡
2位：宮崎フェニックス
3位：HC 大分
　　　あらかき歯科

■女子
優勝：コスモスピッキーズ
2位：レキオクラブ
3位：徳山クラブ
　　　香川レディース

西地区大会を終えて

大分県ハンドボール協会事務局長　上村 英司

第36回全日本クラブハンドボール選手権大会西地区大会が、7月9日（土）・10日（日）の2日間、大分市のコンパルホール他4会場で開催されました。大分県も含めて九州地方はそれまで雨がずっと続いていたのですが、奇跡的にもこの2日間は好天が続きました。室内でウォーミングアップができる会場が確保できなかったことや、選手が荷物を抱えて会場へ移動すること等を考えると、運営側としては幸運に恵まれていたと思います。

また、この大会は、日本協会公認審判員の上級審査の対象大会でもありました。A級・B級合わせて31名の受検者が審査のために吹笛するゲームが多くあったためか、他の大会とは違う種類の緊張感も感じられました。私も地元審判員として3試合担当させていただきましたが、受検する審判員の方々が、試合を観戦しながら意見を交換したり、暇を見つけてはルールブックを読んでいたりする姿を見て、自分が審判を始めた頃の新鮮な気持ちに戻ることができました。本来あるべき『審判員の大会に臨む姿勢』を思い出させていただいたことに感謝しています。

大会は一日目予選リーグ、2日目順位決定トーナメントの形で行われました。ハンドボール経験の長い選手が多い大会であるため、好プレーだけでなく観客の目を楽しませようとするトリッキーなプレーも随所に見られました。仕事や学業の傍らでトレーニングや練習を積み重ねているとは思いますが、2日間で3～4試合を戦うのは大変ではないかと察します。選手の皆さんのハンドボール愛が運営の私たちにも十分に伝わってきました。

雄城台高校で使用する電光掲示板を借用にいったところ操作盤がなくなっていて、急遽手でめくる得点表示に切り替えたことや、折からの長雨で舞鶴高校の配電盤が漏電し照明が点かなくなったこと（試合開始時間には復旧）等々、予期せぬトラブルは数え切れないほどありましたが、それぞれの現場で会場責任者をはじめとする大分県協会のスタッフが素早く適切に対処してくれたおかげで、何とか乗り切ることができました。こちらの準備不足からチームの皆さんにもご不便・ご迷惑をおかけしましたが、言いたいことを飲み込んでゲームに集中していただいたようで、当日のクレームや要望は一件もありませんでした。また、今大会には、多くの高校生が補助員として参加し、会場には多くの小・中学生が観戦に来ていました。クラブチームで楽しみながらもハンドボールに真剣に打ち込む選手の皆さんの姿を大分の子どもたちに見せることができたのは、この大会で得た大きな収穫のひとつであると感じています。

最後になりますが、本大会の運営にあたりご協力をいただいた全ての方々に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

戦　評

【男子決勝】

フレッサ福岡　26（17－12、9－11）23　宮崎フェニックス



強豪あらかき歯科を準決勝で破ったフレッサ福岡は、決勝戦でも前半からフットワークを活かした激しいディフェンスで堅い守りを見せる。対する宮崎フェニックスは早いパス回しからのカットインなどで得点を重ねていくが、連戦の疲労からかなかなかペースに乗り切れない時間帯が続く。

フレッサ福岡のBP瀬戸の豪快なミドルシュート、カットインで得点しチームに勢いをもたらすと、フレッサは相手の攻撃ミスを見逃さず速攻でも着実に得点を重ねる。宮崎フェニックスも負けじとスカイプレーを前半終了間際に成功させ、5点差で後半を迎える。

後半に入ってもフレッサのディフェンスは綻びをみせず、落ち着いた試合運びを見せる。宮崎フェニックスは、相手にフィジカルで劣る部分を速攻などスピードで打開しようとするが、ディフェンスが踏ん張りきれずなかなか点差が縮まらない。終了間際、リードしているフレッサ福岡は新ルールで認められたCP 7人での攻撃を試みるも失敗。宮崎フェニックスはその隙を見逃さず、速攻から得点に結びつけ一矢報いた。

絶えず声を出し、ハードワークを厭わず、選手、ベンチ、応援団が一体となって戦ったフレッサ福岡が、見事優勝を飾った。

【女子決勝】

コスモスピッキーズ　17（6－4、11－8）12　レキオクラブ

女子決勝は、沖縄・レキオクラブ vs 大分・コスモスピッキーズという、九州同士の戦いとなった。

立ち上がりお互い波に乗れない中、レキオクラブは巧みなセット攻撃でシュートまでいくも、コスモスピッキーズの守護神岩丸がそれをシャットダウン。一方、コスモスピッキーズは相手の激しいディフェンスになかなか得点を伸ばせずにいたが、阿部のカットインなどで得点を重ね、前半4対6とコスモスピッキーズがリードで折り返す。

後半に入ってから、レキオクラブは7番中地や13番砂川の強烈なロングシュートで得点を重ね追い上げを見せる。 その後も、7mTのチャンスやノーマークのチャンスを作り一気に追い上げたいところであったが、ことごとくGK岩丸によって得点を阻まれ追いつくことができない。一方コスモスピッキーズは、後半から交代で入った選手が走力を武器に加点していき、逃げ切り態勢に入る。

結果、地元大分の大応援団の力を受け、メンバー総力戦で戦い抜いたコスモスピッキーズが17対12でレキオクラブを下し、見事優勝した。

男子優勝：フレッサ福岡

フレッサ福岡 GM 兼監督　栗崎 純一

今回、多くの方に大分県までお越しいただき、応援してくださった事で大きな力になりました。また、応援団を設立、横断幕まで準備いただき、誠にありがとうございました。

私達フレッサ福岡ハンドボールチームは、2016 年 4 月に福岡県糸島市にて活動を開始し、昼間は農業をしながら夕方からハンドボールを行うという、日本では新しいチーム形態で第 1 次産業とスポーツ界を盛り上げられるように日々活動を行っています。

今回、活動開始から 3 か月という短期間で、第 36 回全国クラブハンドボール選手権大会・西地区大会にて初優勝ができた大きな要因は、前月に長崎県佐世保市にて開催された九州クラブ選手権 1 回戦で、前年度優勝チームの長崎社中さんに 17 点差で負けた時の悔し涙だと思います。あの敗戦後に全員で話し合い、徹底して走り込みをしてきました。毎日農業をした後に吐いたり倒れるまで走り、徹底的に自分達の短所を消して、一人一芸をテーマに各選手考えながら練習に励んできました。また、きつい練習では負ける悔しさと天秤にかけて頑張ってきた結果がこのような形となりました。

これから 2018 年度日本ハンドボールリーグに参戦できるよう、チーム一丸となり全力で頑張りますので応援よろしくお願いいたします。



女子優勝：コスモスビッキーズ

コスモスビッキーズ監督　阿部 佳織

今回の西地区大会は、一昨年の優勝を再び地元大分で実現したいという思いで臨みました。1 回戦は HC 長崎、2 回戦は神埼クラブと勝ち進み準決勝は徳山クラブと対戦しました。前半は自分たちのペースで試合を進めることができ、後半に入り 2 点差まで追い詰められる場面もありましたが全体的に自分たちの「守って速攻」で試合を優位にすすめることができました。決勝は、沖縄県のレキオクラブとの対戦でした。試合前に全員で「地元開催で決勝までいけたから、とにかく全員ハンドでみんなで試合を楽しもう」と声をかけて試合に臨みました。2 試合目ということで、前半は両チームとも足が思うように動かずなかなか得点を重ねることができずにロースコアで終わりました。後半からは、コスモスの持ち味でもある「全員ハンド」15 人でフォローしながらみんなが得点することができ、チームコスモスで最後まで戦え 17 対 12 で勝ち、優勝することができました。決勝戦が一番チームで戦うことができたように思います。また、地元大分の声援がなによりも私たちの力となり今回の優勝につながったと思います。今回の大会の成功に向けて運営や準備をして頂いた大分県ハンドボール協会の皆様、また会場作りや役員をして頂いた大分県内の高校生の皆様、ハンドボール関係者の皆様ありがとうございました。



第36回 全国クラブハンドボール選手権大会中地区大会

【最終順位】

■男子	■女子
優勝：HC同志社	優勝：いろは
2位：FSV TOKAI	2位：小松クラブ女子
3位：高山ハンドボールクラブ	3位：大阪教員
4位：HC新潟	4位：三重娘

中地区大会を終えて

兵庫県ハンドボール協会副理事長
兵庫県ハンドボール社会人連盟委員長　松本 茂宏

2013年に「兵庫県社会人ハンドボール連盟」を立ち上げ早3年になりました。初年度は、組織や内規を作成する事務仕事に時間を取られる日々が続きました。そのお蔭で組織もまとまり、創意工夫を凝らし「一致団結」して何事にも全力で向き合う事ができ、兵庫県の大会終了後に反省会を毎回開催し、より有効に大会運営をこなせるようになりました。

今年度は、兵庫県ハンドボール協会にとって全国大会が3つもあり、会長はじめ理事長、役員が色々な事案の対処に忙しい日々でありますが、昨年12月に開催された「第39回全国高校選抜大会」は高体連の若い力が結集し、無事に終了することができました。

今回の「第36回全国クラブハンドボール選手権大会・中地区大会」開催にあたり、会場の手配、予算案等を昨年の12月頃から役員と幾度となくミーティングを重ねました。その中でも、テクニカルデレゲート（以下TDと記す）を養成する事が一番の課題でしたが、兵庫県の全社会人の大会にて審判部がＴＤの研修会を開催して下さり、各社会人のチームより2～4名を育成し、オフィシャルにおいては近隣の高校生が前年度の全国大会での経験を生かし、難なくこなすことができました。

開会式が7月8日（金）午後6時30分より加古川市立総合育館にて行われ、大会初日は2会場に分かれての競技となり、心配していましたTDの課題、時間配分等に特に問題なく初日が終了しました。

2日目は1会場に集約されるので集中して管理体制が取れることができ、初日とは違う緊張感はありましたが、役員共々気を抜くことなく無事に決勝戦を迎えました。

大会の結果、優勝は男子がHC同志社（京都府）、準優勝FSV TOKAI（愛知県）、3位高山ハンドボールクラブ（岐阜県）。女子優勝は、いろは（京都府）、準優勝小松クラブ女子（石川県）、3位大阪教員（大阪府）と、1回戦から決勝戦まで選手の皆さんの熱い思いの戦いで大いに盛り上がりました。

最後になりしたが、社会人のために素晴らしい大会を企画していただきました「公益財団法人日本ハンドボール協会」、そして、大会のお世話をしていただきました関係各位の皆様に感謝とお礼を申し上げ、挨拶にかえさせていただきます。

戦　評

【男子決勝】

HC同志社　32（16－7、16－21）28　FSV TOKAI



地元近畿のHC同志社と一昨年度3位のFSV TOKAIとの対戦となった決勝戦。FSVのスローオフで始まった。開始1分同志社が児玉の7mTで先制する。同志社は粘り強いDFから得点を重ねていき、4対0と引き離す。7分には同志社は退場者を出すが、リードを保ったまま中盤戦に入る。さらに同志社は、3-2-1DFから林の速攻や赤岩のポストシュート、児玉の7mTで12対5とリードを広げる。一方のFSVは、18分に退場者を出し、攻め手を失ってしまう。流れを変えたいFSVは19分にタイムアウトを取る。これ以上離されたくないFSVだったが、同志社の堅守により16対7とさらにリードを許して前半を折り返した。

後半は落ち着いたプレーで、両チーム得点する。4分FSVは再び退場者を出し、点差をさらに広げられ、苦戦を強いられる。中盤、両チームともに退場者を出し、その間にFSVは2点を取り返すと、同志社・児玉をマークして相手ミスを誘い、速攻などで追い上げる。17分同志社に退場者が出たと同時にプレッシャーDFに切り替え、FSVの反撃が始まる。流れの悪い同志社はタイムアウトをとったが、ミスは続く。FSVは4点差まで詰め寄ったが、前半のリードを生かした同志社が、32対28で優勝を飾った。

【女子決勝】

いろは　22（8－7、14－14）21　小松クラブ女子

どちらが勝っても初優勝となるいろはと小松クラブ女子の決勝戦は、いろはのスローオフでスタート。6-0DFのいろはに対して、5-1DFの小松クラブ。開始2分、いろは・山口のシュートで先制、お互いのDFを崩すことができず、開始15分で3対3とスロースタートな展開となる。その後も一進一退の攻防が続き、いろは・淨慶、乙井の速攻で7対6。このまま引き離すかと思われたが、小松も竹村のサイドシュートで応戦、7対7の同点となる。前半終了間際にいろは・山上がノータイムフリースローを決め、歓喜に沸いた前半は8対7で終了。

後半開始早々、いろは・山口のパスカットからの速攻で先制。勢いに乗るかと思われたが、小松・青柳のミドルシュートと7mTで同点とする。13分いろは・蔵城のカットインをきっかけに、17対15と勝ち越しに成功、その後も最後までシーソーゲームが続いた。21対21の同点で迎えた終了30秒前、いろは・阪本がサイドシュートをねじ込み、それが決勝ゴールとなりいろはが初優勝を飾った。



男子優勝：HC 同志社

HC 同志社　森 賢太郎

この度、第 36 回全国クラブハンドボール選手権大会・中地区大会において優勝できたことを大変嬉しく思います。JOT の京都府予選で敗退した後、「JOT に出場することはできなかったが、それに相応しい実力があるということを証明しよう」と臨んだこの大会に、不安などは一切なく自信に満ち溢れて兵庫に向かいました。１日目は、対戦相手を突き放し大差で圧勝することができましたが、２日目の準決勝、決勝は険しいものでした。

準決勝の高山ハンドボールクラブとの試合は、我々にとって今大会最大の山場となりました。高山の堅い DF からの素早く力のある速攻に圧倒され、前半は２点ビハインドで折り返しました。後半にも高山の速攻に圧倒されましたが、「いつか必ず流れがこちらに来る」と信じ、粘り強い DF を展開し、攻撃でも粘ってノーマークを作り、点差を開けられることなく時間が流れました。退場者を出す場面でも、力強い守りで相手にしがみつき、試合終了のホイッスルが鳴り、スコアを見ると 29 対 27 で勝利。「自分たちはこんなところでは負けられない」という我々の意志が勝ったのだと思います。

決勝の相手は愛知県代表の HSV TOKAI。実力者ぞろいのチームでしたが、我々雑草集団の目には優勝の文字しか見えておらず、開始直後から３：２：1DF を敷き、堅いディフェンスからボールを奪い、全員で相手陣地へなだれ込む、がむしゃらで勢いに任せた速攻で、前半９点の決勝戦らしからぬ大差で折り返しました。しかし、後半になると HSV TOKAI に意地のマンツーマン DF を敷かれ、こちらのペースを崩された結果、追いつかれそうになりましたが、そこで試合終了のホイッスル。JOT 京都府予選では２年連続で敗れ、自分たちの実力に対する不信感が漂った時期が少なからずありましたが、優勝が決まった瞬間、自分たちの実力を証明できた喜びが湧き上がりました。

我々 HC 同志社はこの夏に、日本リーグ・チャレンジディビジョンが控えています。昨年度は、最終成績４位でしたが、この大会で優勝できたことを弾みとし、チャレンジディビジョン初制覇を狙います。



女子優勝：いろは

いろは主将　習田 佳代

いろはは、結成６年目でチームとしてはまだまだ日が浅く、メンバー自体も安定しない苦しい状態が続いていました。また、今年度は世代交代ということもあり、不慣れな状態の中でチャレンジャーとしてこの大会を迎えることとなりました。大会前にも、メンバーそれぞれに仕事や家庭があったり、家が遠かったりと、練習にも中々人数が揃わず、しっかりとした練習もできていない状態でした。

そんな不安な気持ちを抱えたままでの大会ではありましたが、この３試合全てでチームが一丸となり、「とにかく楽しむ！」という、いろはのチームカラーが出せた試合ができたと思います。ミスをする、点数を取られる…チームとしてはマイナスの事でも、絶対に雰囲気を壊さない、次に繋げてプラスにするようにと、監督をはじめチームで強く意識して挑むことより、コート内の声やベンチからの声はどんな時も絶えず、また、前向きな言葉しか飛び交っていなかったように思います。コートの中で戦っている人、ベンチで声出しして応援をしている人、１人１人の勝利への思いが今回の優勝に繋がったと思います。

今回の大会においての優勝という結果は、チームを活気づけることとなり、本当に貴重なものとなりました。この経験と気持ちを忘れず、これからもチームとしての発展とハンドボールの活性化にも貢献できるよう、いろはらしく活動していきたいと思います。

監督より「チームのメンバーの友情・勝利への強い気持ちで優勝という結果が出せたと思います。応援して下さった皆様にも感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。」というコメントももらっています。

最後になりましたが、応援して下さった方々、また、大会主催者、関係者の方々、本当にありがとうございました。



第36回 全国クラブハンドボール選手権大会東地区大会

【最終順位】

■男子
優勝：甲府クラブ
2位：東陽
3位：渡辺組

■女子
優勝：宮城ケヤッキーズ
2位：オレンジクラブ
3位：SAKURA クラブ

東地区大会を振り返り

北海道社会人ハンドボール連盟理事長　髙橋 英明

今回の大会は北海道で初めて開催されるクラブ選手権であり、また北海道新幹線が開通して初めての大きなハンドボール大会として、昨年オープンした函館アリーナと函館大学体育館で開催されました。北海道ならではの涼しい気候の中､たくさんの熱戦が繰り広げられました。

昨年までとは異なり今年度は、男子は12チームが参加、3チームによる予選リーグと決勝トーナメント、女子は9チームが参加、3チームによる予選リーグと各組1位による決勝リーグ戦を採用、参加チームが複数の試合を戦ってもらえるよう変更されました。試合は全体的に僅差の試合が多く、最後まで気を抜けない試合が続きました。

その中で、男子優勝の甲府クラブはフットワークが良く、最後まで走り切れる選手が多かったように思われます。マンツーマンディフェンスを見せるなど、他を圧倒する走力を身に着け、優勝する要因となりました。

一方、女子も予選リーグで1点差、引き分けのブロックもあり、どこが予選突破するかわからないという状況もありました。クラブチームらしい駆け引きで勝敗が決する試合も見られ、若手とベテランがお互いに持ち味を出した面白いゲームが多く見られました。

試合後には函館の観光を楽しむチームもありましたが、決勝トーナメントや決勝リーグへ進んだチームは、弾けるわけにもいかず、少し消化不良といったところでしょうか。

また、やはり北海道は遠いということになるのでしょうが、帰りの飛行機の時間を気にされるチームが多くみられました。新幹線が開通している函館で開催するのがいいのか、各地へも空路をもち、羽田空港へも遅い時間まで飛行機が飛んでいる新千歳空港を擁する札幌で開催する方がいいのか、観光地・函館でホテルの確保ができるのか、次回までに考えなければならない多くの課題が明らかになった大会となりました。

多くの方々に足を運んでいただき、満足してもらえる大会運営をできたかどうか、いささか心配ではありますが、無事大会を終えることができましたことを皆様に感謝し、お礼申し上げます。

戦　評

【男子決勝】

甲府クラブ　37（15－6、22－12）18　東陽

男子決勝は、前年優勝の甲府クラブと、準決勝を延長戦の末勝ち上がった東陽の対戦となった。前半2分、甲府クラブが日原選手のシュートで先制すると、東陽も負けずに3連取しすぐに逆転する。その後、甲府クラブは足を使った攻撃で反撃を開始。前半9分には3対3の同点に追いつく。延長を戦って疲れのみえる東陽は、甲府クラブに速攻を許してしまい、11分過ぎには3対6、17分には4対10と差を広げられた。その後も着実に得点を重ねた甲府クラブが前半を15対6と大きくリードして折り返した。

後半に入っても甲府クラブの運動量は衰えず、終始東陽を圧倒、37対18で快勝、2連覇を飾った。

【女子決勝リーグ】

オレンジクラブ　24（16－7、8－4）11　SAKURA クラブ

オレンジクラブ・横倉の得点からスタートした試合、SAKURA クラブもすぐに取り返し、11分過ぎまで5対5の互角の戦いを見せる。しかし、徐々に高い身長を活かしたDFが機能してきたオレンジクラブは、12分以降相手に得点を許さず、一気に引き離し16対7で前半を終了した。

後半に入っても大勢は変わらず、オレンジクラブは固いDFから余裕を持った試合運びで24対11とゲームを制した。

宮城ケヤッキーズ　24（14－11、10－10）21　オレンジクラブ

決勝リーグ初戦を快勝したオレンジクラブが、勢いに乗って宮城ケヤッキーズと対戦。しかし、元気なケヤッキーズは立ち上がりから飛ばし、3対0とリードする。その後、オレンジクラブもペースを取り戻し、12分に同点に追いつく。身長で劣る宮城ケヤッキーズだが、全員で動き回り14対11で前半を終える。

後半、多少疲れが出始め、退場者を出したオレンジクラブであったが、高山、一木を中心によく守り、一進一退の攻防を繰り広げる。後半11分過ぎにオレンジクラブが同点に追いついたところで宮城ケヤッキーズがタイムアウトを請求。これが功を奏し4連取、今度はオレンジクラブがタイムを取るが直後に退場者を出し、5点差に広げられてしまう。残り4分から3連取するも最後にダメ押し点を許してしまいタイムアップ。宮城ケヤッキーズが熱戦を制した。

宮城ケヤッキーズ　22（11－5、11－10）15　SAKURA クラブ

今大会最終戦。全チームに優勝の可能性を残す大事な一戦となった。立ち上がり2分まで両チーム得点を挙げられない展開となったが、宮城ケヤッキーズ・鈴木のシュートで初得点を挙げると、10分過ぎまでSAKURA クラブに得点を与えず5連取。SAKURA クラブが執印のポスト、大畠のシュートで2点を返すが、7mTを外すなど波に乗れず、11対5と宮城ケヤッキーズがリードして前半を折り返した。

後半、SAKURA クラブが意地をみせて8分までに10対12と追い上げる。ここから両チームミスが目立ち得点を伸ばせなかったが、宮城ケヤッキーズがベテラン橋沼の好リードから1点ずつ得点を挙げて、じわじわと差をつけ始める。最後まで粘るSAKURA クラブを突き放し、22対15で初優勝を手にした。



女子優勝：宮城ケヤッキーズ

宮城ケヤッキーズ　加藤 久美子

私たち宮城ケヤッキーズは、平成 13 年のみやぎ国体に向けて平成 11 年に結成されたチームです。平成 12 年の第 5 回ジャパンオープントーナメント大会優勝、平成 13 年のみやぎ国体第 3 位という結果を残して以来、今日まで活動を休止していました。しかし今年、クラブ選手権に出場しようと新たなメンバーを募り、全国大会出場を目指し練習しました。土・日を中心に地元の高校生と一緒に基礎練習やゲームに取り組んできましたが、メンバー全員が揃うことはなかなかできませんでした。しかし、どのメンバーとプレイしても合わせることができるように、チームで声を掛け合って練習しました。6 月 18・19 日に行われた東北クラブ選手権大会では、1 試合目はなかなか自分たちの思うようなゲーム運びができず、苦しい展開でしたが、試合を重ねるごとに連携が取れるようになり、チームとしての一体感が出てきました。その結果、優勝することができ、目標であった全国大会の出場権を勝ち取ることができました。

その全国大会では、NEW ケヤッキーズ結成当初から、チームみんなで口ずさんでいた、『力の限り☆ゴーゴ、ゴーッ!!』を合言葉に、1 試合 1 試合全力で戦いました。予選リーグでは、練習の成果を発揮することができ、決勝リーグに進むことができました。決勝リーグでは、2 試合とも厳しい試合展開ではありましたが、一人一人が役割をしっかり果たし、得点を重ねることができました。ゴールキーパーを中心にアグレッシブなディフェンスをすることで、相手のミスを誘い速攻へつなげることを徹底しました。チーム全員が最後まで力の限り戦い抜いた結果が、今回の優勝につながったと思います。また、決勝リーグ当日、朝市で食べた海鮮丼も優勝への原動力になったと思います。函館の美味しいものをたくさん食べることができ、とても充実した全国大会でした。

第 7 回世界ビーチハンドボール選手権

日時：7 月 12 日～ 17 日
場所：ハンガリー・ブダペスト

男子

【決勝】ブラジル vs クロアチア　0：2（15-19, 18-21）

【3 決】ハンガリー vs カタール　1：2（15-14, 14-20, 6-7）

●最終順位●
①クロアチア
②ブラジル
③カタール
④ハンガリー
⑤スペイン
⑥ウクライナ
⑦オマーン
⑧エジプト
⑨バーレーン
⑩ウルグアイ
⑪ USA
⑫オーストラリア



女子

【決勝】ブラジル vs スペイン　1：2（18-8, 12-16, 4-7）

【3 決】ハンガリー vs ノルウェー　1：2（16-12, 17-20, 6-8）

●最終順位●
①スペイン
②ブラジル
③ノルウェー
④ハンガリー
⑤イタリア
⑥チャイニーズ・タイペイ
⑦アルゼンチン
⑧オーストラリア
⑨タイ
⑩ポーランド
⑪ウルグアイ
⑫チュニジア





ドイツ・ライプツィヒで学んだ子どもためのハンドボール指導



中山 紗織
筑波大学大学院

わたしは2014年7月から2年間、ドイツのライプツィヒ大学スポーツ学部に交換留学生として在籍していました。大学では主にハンドボールとトレーニング学を学び、SC DHfKライプツィヒというハンドボールクラブのU10チームのコーチとして活動しました。わたし自身は中学校入学と同時にハンドボールを始め、高校そして、筑波大学体育専門学群を卒業後、同大学院へ進学、修士論文の執筆を残してドイツへ留学しました。留学を決めた理由は、もともとライプツィヒが起源であるスポーツ運動学と、小学生やハンドボールを始めたばかりの選手に対してどのような指導の方法論があるのかいうことに興味をもっていたからです。

この2年間では特に、SC DHfKライプツィヒのU10のコーチで、ライプツィヒ大学で行われている国際トレーナーコースの指導員をしているダニエル・アンドレさんと、同チームU12の指導者でライプツィヒ大学教授のノバート・シュレーゲル先生の2人からハンドボールの理論とその実践を学びました。また、実際に小学校を訪問してハンドボールを指導する機会や、U10のコーチとして自分で練習を考えて指導する機会も頂き、とても良い環境の中でたくさんの経験を積むことができました。

現在、ライプツィヒのあるザクセン州のU10のカテゴリーでは、一試合を通してマンツーマンディフェンスをすることがルールとして定められています。一試合は基本的に15分（前後半7分30秒）で行われます。マンツーマンディフェンスをさせることの目的は、"自分がマークしている選手"と"ボール"だけに注意を限定させるためです。子どもが大人と同じルールでハンドボールをやることは、把握しなければならない情報量が多すぎるという考え方に基づいています。マンツーマンディフェンスの利点としては以下の7点が挙げられています。

- ●競技力が同じくらいの相手選手に直接対峙させられること
- ●全員に対して学習・成功体験をもたらすこと
- ●深さと幅のあるゲームにできること
- ●コート中央でのプレーを促進させること
- ●一人一人の活動空間がゾーンディフェンスに比べて広いためボール有／無の一対一が攻撃でも防御においても要求されること
- ●戦術的な要求をなくし自由で創造的なゲームを可能にすること
- ●ディフェンスにとってはボールを獲得することが重要であること

ドイツでは、これらの利点を実際の試合で活かすために練習が行われています。わたしが初めてこのように明確な目的とそれを設定する理由、そしてそれらをきちんと理解した指導者に出会ったときに、小学生年代に対するマンツーマンディフェンスは利点しかないのではないか、このシステムをこのまま日本でやればいいのではないかと思うほど、10歳以下の選手にとって適したルールであると感じました。しかし、チームの指導者は、「アイスランドやノルウェーにおける子どものハンドボールの試合では、ドイツのようにルールを定めておらず、子どもたちのやりたいようにプレーをさせている。それによって、その子どもたちが将来的により創造的なプレーをできるのではないか。」と考えていました。彼らが、将来世界のトップレベルでプレーする選手を育成するために、常にどのような練習や試合を行うべきかを考えていることに感銘を受けました。



ザクセン州のU8では、U10とは違った目的、内容で試合が行われています。このカテゴリーの試合は5つのチームがひとつの体育館に集まり、ハンドボールコートを横に3等分したコート（12m×20m）において、ミニハンドボールとハンドボー

ルに似たボールゲーム、そして多面的な動作のテスト（約4種類）を行いそれらの合計によって順位が決められます。ここでは順位やテストの結果が大切なのではなく、ハンドボールという競技に慣れること、そして試合の度に異なる多面的な動作のテストを行うことによって運動経験を集めることを目的としていました。

ここまで試合の行い方について紹介しましたが、規則やコンセプトを支える“子どものハンドボール”に対する考え方が一番大切であると感じています。私がこれからも常に心に留めておきたいと思った言葉は『子どもの練習は“小さな大人”のための練習ではない』です。“小さな大人”のための練習とは、大人の練習をそのまま子どもに行うことです。しかし、そのような練習方法で、その時の子どもたちに適した能力を伸ばしたり技術を習得させたりすることは難しいと思います。

では、何が“子ども”のための練習なのか。例として三つのポイントを挙げます。一つ目は、15分程度で練習メニューを変えるトレーニングを組み立てることです。これは、神経系の発達の関係から子どもにとってひとつの練習を15分以上集中し続けることは難しく、長く同じことを練習しても効果的ではないと考えられるからです。二つ目は、常に変化のある多面的な動作・運動経験を積めるトレーニングを組み立てることです。幼少期からハンドボールに特化した反復練習を行うこと、つまり早期専門化はその後の子どもたちのプレーの伸びしろを制限してしまうと考えられるからです。三つ目は、コート上で常に多くの子どもたちが運動できるよう計画することです。一般的によく行われる一列または二列に並んで一人ずつ順番に打つようなシュート練習は、待ち時間が長いのに対し、一人ひとりが動く時間は短く、運動課題も単純・モノトーンです。実際のハンドボールの試合状況とは異なります。一人当たりの運動量を確保するために指導者は工夫をしなければなりません。

子どもたちは“子ども”として、練習でも試合でも楽しむ権利を持っていて、指導者もその練習をやること自体に楽しさを覚えさせる内容を考えることが小学生、特に低学年の指導において大切だと思います。“楽しい”というのは、“ふざける”という意味ではなく、その練習を行うことに楽しさを感じるという意味です。もちろん指導者の話をきちんと聞かない子や、明らかに集中していない子に対しては厳しく注意しなければならない時もあると思います。また、楽しい練習というと、“手段”である練習メニューが注目されてしまいがちですが、目的なく楽しく練習をさせてもハンドボールの技能はなかなか身につきません。指導者は、まずはその子どもたちに適した目的、そして目的にあった練習メニューを設定しなければなりません。

2015年度から日本では、Jクイックハンドボールという競技規則に則って小学生の試合が行われています。子どもたちに将来どんなハンドボールをやってもらいたいのかという将来像を持った上で、目的に適した方法で練習を行うことがこの年代の選手にとってよりよい影響をもたらすと思います。競技規則とそのコンセプト、そして練習内容の全てが噛み合った時に、子どもたちがハンドボールを通してたくさんのことを学び、将来トップレベルで活躍するための経験を積むことができると思います。

最後になりますが、ライプツィヒで充実した2年間を過ごすことができたのは、サポートしてくださった方々、そして、きっかけを作ってくださった方々のおかげです。ありがとうございました。SC DHfK ライプツィヒという素晴らしいクラブと指導者の方々に出会えたことに感謝し、これからはドイツで学んだことを多くの日本の指導者の方々に伝えたいと考えています。



寄稿

「ガラパゴス化」を脱せよ

共同通信社運動部　柄谷 雅紀



「ガラパゴス化」。日本国内に閉じこもって競技してしまうと言う意味で、よくこの言葉を用いる。これはハンドボールだけでなく、多くの日本のスポーツ界が抱えている問題ではないだろうか。特に、世界と力の差が開いてしまっている競技では、国内に閉じこもってばかりいても永遠にその差は埋まらない。

私はバレーボールを専門とする記者であるので、比較しながらハンドボール界を見ていきたい。男子バレーボールは1964年の東京五輪で銅メダル、1968年のメキシコ五輪で銀メダル、そして1972年のミュンヘン五輪で金メダルを獲得し、一時代を築いた。しかし、現状は世界に大きく水をあけられてしまっている。1996年のアトランタ五輪から今夏のリオデジャネイロ五輪までの6大会で、出場できたのは2008年の北京五輪だけ。その北京でも、五輪本番は全敗である。アジアの中ではイランが20年ほど前からジュニア年代の育成に力を入れて大型化を進め、世界の上位争いをできる力を持つようになった。その壁を破らなければ、五輪出場はなかなか見えてこない。

男子ハンドボールはそれ以上に深刻だ。1988年のソウル五輪で11位になって以降、7大会連続で五輪出場を逃している。五輪の出場権を得るためには、帰化選手が代表のほとんどを占め、昨年の世界選手権で準優勝したカタールを倒さねばならない。その上、アジアの雄として君臨してきた韓国もいる。バレーボール以上に厳しい状況と言っていいだろう。

代表選手の構成はどうなっているのだろうか。バレーボールで今年の6月に行われたリオデジャネイロ五輪世界最終予選兼アジア予選を戦った14人の中で、海外のリーグで戦った経験があるのは2人だけだった。それも1シーズンを過ごしただけである。ハンドボールでは昨年のリオデジャネイロ五輪アジア予選を戦った18人の中で、海外チームに所属していたのは1人。サッカーの2014年ブラジルワールドカップ日本代表は23人中12人が海外組だったことを考えると、バレーボールもハンドボールも海外経験がある選手が圧倒的に少ない。

もちろん海外でプレーする選手が多ければいいという訳ではない。しかし、五輪に出られない日本の国内リーグで、日本人ばかりを相手にしていても技術、戦術、体力の伸びは限定的なものになる。ましてやバレーボールもハンドボールも、体格が大きく影響する競技である。身長2メートルを超える選手がざらにいる強豪国と対等に戦うためには、常日頃からそのスケールに慣れておかないといけない。いまのバレーボール界、ハンドボール界のように「ガラパゴス化」していては、世界と肩を並べて戦えるようになるのは難しいだろう。

バレーボールで今季初めて代表入りした選手はデビュー戦の後に「ブロックの圧力にびっくりした。日本では簡単に決まるボールが全く決まらなかった」と驚いていた。おそらく、それはハンドボールでも同じはずだ。日本国内では考えられないようなボールが飛んできたり、予想だにしないところから腕が伸びてきたりする。それに初めて相対した場合だと対応できないが、普段からそういう状況でプレーしていれば対処法を身につけられる。野球に例えると、普段130キロの球を打つ練習をしている選手がいきなり150キロの球を投げられると面食らうが、普段から150キロを打つ練習をしていれば対応できる。これと同じ事である。

そのために手っ取り早いのは、選手自身が海外のリーグで経験を積むことであ

る。普段から体が大きくてパワーもある外国人選手と戦うことで、そのプレーのスケールに慣れて、対応する術を身につけることができる。そうなれば、代表戦になっても戸惑うことなくプレーすることができる。

もう一つ方法が考えられる。個人で海外のリーグでプレーすることが難しければ、代表チームの国際戦をより多くするのだ。例えばラグビーのサンウルブズがやっているように、代表チームで海外のリーグ戦に参加することができないか。そうやって外国人選手のプレーに慣れていくことが、代表チームの強化に直結するはずである。

ハンドボールの代表チームは、おそらくバレーボールの代表チームよりも国際戦が少ない。バレーボールは毎年ワールドリーグという国際大会があるし、4年に1度のワールドカップ、グランドチャンピオンズカップ、世界選手権にアジアの大会もある。そこである程度の経験を積むことができるが、それでも「海外のチームとの対戦経験が少なすぎる」とバレーボール男子日本代表の南部正司監督は嘆く。レベルの高い欧州に遠征し、各国の代表チームやプロチームと対戦する機会をもっと増やすべきである。

1972年ミュンヘン五輪で獲得したバレーボール男子日本代表の監督だった故松平康隆氏は、1964年東京五輪の前に長期の欧州遠征を行った。結果は22連敗という不名誉なものであったが、ここでの経験は間違いなく生かされ、銅、銀、金という3大会連続でのメダル獲得につながった。その当時とは違い、現在でこれだけの長期遠征を行うは難しいかもしれない。だが、本当に代表を強くするためにはそれぐらい海外チームとの対戦経験を積まなければならないだろう。

日本のハンドボール界はバレーボール界よりも世界に目を向けていると思う。今年、代表入りしていた銘苅淳はハンガリーのリーグで長年プレーしているし、ヒロシマ国際・大分熊本サーキットで代表入りしている土井レイミ杏利はフランスリーグに所属している。女子日本代表の石立真悠子も海外のリーグで複数シーズンに渡って戦っている。植松伸之介氏のように、ドイツでプレーして監督まで務めた人もいる。これらの選手から刺激を受けて海を渡る選手がもっと多く出てくれば、代表チームの実力は飛躍的に伸びるだろう。

また、ハンドボールは男女ともに外国人の監督を招聘した。これはまたとない変革のチャンスである。これまで「ガラパゴス化」していた日本チームでは知り得なかった世界標準の技術、戦術を知ることができる。さらに、それを日本国内で指導に当たっている多くの指導者に広めることができる。今までのやり方で「日本一」になることはできても、「世界で勝つ」ことはできていないのだから、世界を知っている監督から知識をできる限り引き出すべきだろう。もちろん代表チームの強化は最優先事項である。しかし、それだけではなく選手の育成方法や技術指導法、戦術など学ぶべき事は多くある。それらを学び、吸収し、日本代表の強化に直結するような育成システムを構築する絶好の機会だ。

4年後には東京五輪がある。開催国枠での出場がほぼ確実な中で、代表の強化は急務である。注目が普段の比にならない自国開催の五輪で惨敗するようなことがあれば、そこで華々しい結果を残した競技に有望な子どもたちが流れていってしまうのは容易に予想できる。逆に、そこで予想を覆すような成績を残すことができたなら、競技人口を劇的に増やせる契機にもなり得る。ハンドボールは日本国内でこそテレビ中継も少なく、新聞等で取り上げられる機会も少ない。しかし、ヨーロッパでは抜群の人気を誇る国も多い。激しい体のコンタクトに、緻密な戦略が必要とされる球技である。ルールも比較的わかりやすく、日本代表が世界の舞台で活躍すれば、ラグビーのように一気に人気に火が付く可能性も秘めている。そのためにも、やはり日本代表は強くならねばならない。

繰り返しになるが、世界と対等に戦うために最も必要とされるのが海外勢との対戦機会を増やすことだ。国内にこもってばかりいても、世界には追いつけない。「ガラパゴス化」を脱せよ。日本代表を強化するためには、これが至上命題になる。

～協会再構築への期待～

企画・広報委員
早川　文司

フリースロー
Free Throw

「今回出場権を獲得できなかった競技；ハンドボール」

これは日本オリンピック委員会（JOC）のホームページ内にあるリオデジャネイロ・オリンピック日本選手団編成数の欄外に書かれている注釈である。

陸上から始まってテコンドーまで27競技の男女別選手、スタッフの参加数が一覧表にまとめられている。実施28競技中、日本から出場しないのはハンドボールだけである。

サッカー女子、バレーボール男子など期待されながら、出場権を獲得できなかった種目はあるが、競技種目全体で出場権を獲得できなかったのは、わずか1競技だけだ。

ハンドボールのファン、あるいは愛好者、関係者らが、この編成表を見て、どのような気持ちになるだろうか。私は「JOCの意地悪。」と言いたいほど改めて悔しさと悲しみがこみ上げてきた。

毎回、予選に時期が近づくと「今度こそ出場」の期待を抱き、そして落胆を繰り返してきている。もちろん選手、スタッフを責めるつもりは全くない。晴れ舞台を夢見て一生懸命プレーしたことには、むしろ慰めの言葉をかけたいくらいである。

今回のリオ大会への出場権を逃した時、友人が自嘲気味に話した言葉を思い出す。

「いつまでも夢を見ていても仕方ない。もう五輪、五輪と言うのはやめた方がよさそうだ。期待すればするほど落胆が大きい。それよりも自分の周辺でのハンドボールを楽しんだ方が気持ちが楽だし、楽しいに決まっているよ」

割り切ってしまうのは簡単だが、人間、そうそう気持ちが切り替えられるものでもあるまい。しかも、28競技中ただ一つ、出場できない現状が目の前にあればなおさらである。

4年後は東京大会。開催国枠で出場可能ながら、コートに立てばいい—ではすまされない。ホスト国としてのメンツもあるし、ある程度の結果も出さなくてはなるまい。そのための準備期間は限られている。

このほど日本協会は実務者のトップ2人が来年6月までの任期を残して相次いで退任した。引退と管理責任を取ってのものだった。そして副会長兼専務理事に日本ハンドボールの顔として活躍した蒲生晴明氏が就任、おりひめジャパンを率いてリオ五輪予選を戦った栗山雅倫氏も常務理事として協会運営にタッチすることになった。東京大会を控えているだけに、これまで以上に激務である。日本協会再構築に向けてどのような手腕を振るうか。国際感覚を生かしたビジョンを掲げ“ニュージャパン”への道筋を示してもらえるものと大いに期待している。

訃報 太田耕治様 ご逝去
（愛知県ハンドボール協会名誉会長）

愛知県ハンドボール協会名誉会長太田耕治様が6月17日85歳でご逝去されました。

旧制天王寺中学校でハンドボールに出会われ、その後名古屋大学でハンドボール部に入部、依頼70年余にわたり生涯現役としてハンドボールをこよなく愛され続けてみえました。

全日本マスターズ大会には最初から参加され、一昨年の22回大会まで最高年齢者プレーヤーで参加されました。

昭和41年から始まった愛知県内のクラブハンドリーグにも発足から参加され、最近でも年に数回は参加されておられました。

昨年度9月に開催された開催100回記念の折には元気な姿で始球式をしていただきました。これがハンドボールを投げられた最後になってしまいました。（写真下）

協会の役員としては昭和44年愛知県ハンドボール協会理事に就任、その後昭和61年4月に会長に就任。平成19年3月会長を勇退するまで、21年間わたり会長をされました。温厚かつ誠実な人柄で協会運営をリードし、競技力の強化、指導者の育成などに情熱を持ってあたられ、愛知県ハンドボール協会の組織基盤の確立に大きく寄与されました。

仕事面では昭和32年現役で司法試験に合格され、昭和33年卒業後司法修習生に採用され、本年3月まで現役弁護士として最後まで法廷にも立たれていました。

これまでのハンドボール競技の普及・振興の功績により平成19年秋の叙勲で旭日双光章を受賞されました。

愛知県協会といたしましてもこのような偉大なる先輩を失って、まさに痛恨の極みですが、まずは太田名誉会長が示された指針の方向をしっかりと見定め、足元を固めて愛知県協会が一丸となって前進します。





■略歴

昭和6年6月10日	大阪市南区にて出生
'13年4月	大阪府立女子師範学校（現大阪教育大）付属小入学
'19年4月	大阪府立天王寺中学（旧制）入学
'23年3月	天王寺中学（旧制）中退　愛知県へ移住
'28年9月	大検取得
'29年4月	名古屋大学法学部入学
'33年4月	司法修習生に採用
'35年4月	愛知県弁護士会に登録 佐治良三法律事務所に勤務
'42年4月	太田耕治法律事務所を開設し独立
平成5年4月	太田・渡辺法律事務所開設し現在に至る

■ハンドボールの略歴

昭和19年5月	大阪府立天王寺中学（旧制）にてハンドボールに出会う
'29年4月	名古屋大学法学部入学と同時にハンドボール部に入部
'41年2月	タヨシ産業の一員として全日本実業団選手権に3年連続参加、主にGKとして出場
'41年10月	名古屋大学卒業生らと愛知県クラブチームハンドボール連盟の設立に参画。名大クラブの一員としてリーグ戦に参加
'44年4月	愛知県ハンドボール協会理事に就任
'45年4月	同　常任理事に就任
'46年3月	全名大で台湾遠征（4戦4勝）
'52年4月	愛知県ハンドボール協会副会長に就任
'61年4月	同　会長に就任
平成19年3月	同　会長退任
平成19年4月	愛知県ハンドボール協会名誉会長に就任

＊全日本実業団ハンドボール連盟　監事（10年間）
＊東海ハンドボール協会会長（2回8年間就任）

■主な表彰歴

昭和63年3月	財団法人日本ハンドボール協会50周年記念表彰
平成16年3月	財団法人愛知県体育協会体育表彰（特別体育功労）
'17年11月	愛知県教育表彰（体育功労）
'18年11月	愛知県表彰（体育功労）
'19年11月	旭日双光章

「日体協公認コーチ養成講習会専門科目講習会」の実施報告

指導委員長　藤本　元

1．講習会概要

2016年6月24日（金）から27日（月）までの4日間、味の素ナショナルトレーニングセンターにおいて、日本体育協会公認コーチ養成講習会専門科目講習会を開催いたしました。今までクオリティーにこだわった「コーチング実習」をメインに行ってきたこの講習会は、他の競技団体のそれと比べてもハードなことで有名です。大変な講習会にも関わらず、受講者はもとより、日本体育協会、他の競技団体からも高い評価を受けて参りました。「この講習会にもっと多くの指導者に参加していただきたい！」との思いから、カリキュラム内容を今年度から改変し、開催期間を6日間から4日間へと短縮しました。おかげ様で、今年度は、44名と例年の2倍近い指導者に受講していただきました（2013年度19名、2014年度20名）。その中には小学生・中学生の指導者から日本リーグの指導者、現役の実業団選手及び日本代表選手まで、幅広い指導者に集まっていただきました。今までと同じ「コーチング実習」を課しながら、さらに内容を付け加え、また従来の講義科目を精査した結果、非常にタフ＆ハードな講習会となりました。しかしながら、受講生の活発な参加により、非常に中身の濃い充実した講習会となりました。受講者のアンケート（無記名）を集計した結果、各講義の評価も4段階評価で平均3.5以上の評価を受けました。

2.「公認コーチ資格」の位置づけと受講希望者の推薦基準

日本体育協会は、「公認コーチ資格」を次のように位置づけております。

【日本体育協会における「公認コーチ資格」の位置づけ】

① 各競技団体の都道府県レベルにおける競技者育成を担当する方のための資格

② 広域スポーツセンターや各競技別のトレーニング拠点において、高いレベルの実技指導をする方にはぜひ取得していただきたい資格

- 有望な競技者の育成にあたる方
- 広域スポーツセンターの巡回指導に協力する方
- 国民体育大会の監督にあたる方　など

この位置づけをもとに、日本ハンドボール協会では、今年度より公認コーチ養成講習会受講者に以下のように推薦基準を設定しました。

【日本ハンドボール協会における公認コーチ養成講習会受講者の推薦基準】

以下の推薦基準を1つ以上満たす者

① 公式大会において各都道府県のベスト4以上の成績を納めたチームを指導した経験を有する指導者

② 各都道府県の競技力向上事業やNTSブロックトレーニングなどにおいて、巡回指導を行う指導者

③ JOCジュニアオリンピック大会や国民体育大会など都道府県の代表チームを指導している、または指導する予定の指導者

④ 高いレベルでの実技指導を行っている、または今後行う予定がある指導者で、各都道府県理事長、各連盟理事長、日本リーグ各チーム責任者が推薦する指導者

この基準をもとに、各都道府県協会、各連盟、日本リーグチームから受講希望者を推薦していただきました。なお、今年度の受講希望者の推薦申し込みの締め切りは、2016年3月4日でした。

3．カリキュラム内容変更による受講開催期間の短縮

カリキュラム内容の変更により、昨年度まで6日間で60時間をかけて行っていたこの講習会を、今年度は4日間で40時間へと短縮しました。この20時間のギャップは、自宅研修として受講者に事前の個人課題を課すことで補い、またこの個人課題を講習会で活用しました。

【自宅研修としての個人課題内容】

① 私が描くハンドボール指導構想

これまで、自分が監督・コーチを務めたチームや、これから携わるであろう将来のチームをイメージして、「チームプラン」・「ゲームプラン」・「トレーニングプラン」について、自分の考えやこだわりを整理する。

→講習会において課題発表時に20分間のプレゼンテーション

② 仲間と描くコーチング実習案

講習会で行われる「コーチング実習」の課題となる2対2の攻撃または防御について、自分の理論を整理する。

→講習会においてグループ検討時にプレゼンテーション

4．講習会のカリキュラム構成の意図

今回の講習会では、2つの大きな意図を持ってカリキュラムを構成しました。1つは、ハンドボールゲームの全体像や性質を理解してから、そのゲームに必要なチーム・グループ・個人技能へと競技力の全体構造を捉え直してもらうことです。そのために、ハンドボール競技の特性や歴史を再度理解してもらい、ゲーム局面の捉え方、実技を含めた世界における戦術の発展、ゲームの分析方法、これらの内容を踏まえて、コーチング実習では攻撃及び防御のグループ・個人技能へと講習会を展開しました。また、講習会の後半には競技に必要となる体力面へのアプローチ、どうしても不足がちになるゴールキーパー技能トレーニングを入れました。

もう一つの意図は、競技に打ち込んでいく我々指導者また選手にとってのハンドボール競技の価値とは何なのか、また、ど

のようにすれば指導者として成長していくのかを考え直す機会にしてもらうことです。そのために、ハンドボールゲームの成り立ちを踏まえた指導者のあり方を日本女子体育大学教授の笹倉先生に、指導者がどう熟達化していくのかを筑波大学教授の會田先生に講義していただきました。さらに、サッカー競技から、選手、指導者、保護者への啓蒙活動で定評のある岐阜経済大学の高橋正紀教授をお招きし、日常における非日常としての競技の捉え方から、競技というものを選手、指導者にどのように価値付けていくのかについて講義していただきました。いずれの講義についても、受講者から高い評価をいただきました。

5. 講習会クオリティー向上のための「アクティブ・ラーニング」の積極的な導入

この講習会への推薦基準を見ていただければ分かる通り、受講者のほとんどはすでに現場で多くの経験を積まれた指導者であり、自分なりの理論をすでに構築していることが想像されます。この講習会の狙いとして、そうした指導者に今までの自分のコーチングを整理しながら振り返ってもらうこと、また、他の指導者が行ってきたコーチングのフィロソフィーやノウハウを共有してもらうこと、があります。こうした狙いをより効果的に達成するために、「アクティブ・ラーニング」形式を積極的に導入しました。

> 【アクティブ・ラーニング】（文部科学省）
> 教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学修への参加を取り入れた教授･学習法の総称。

今回の公認コーチ養成講習会では、計19時間の「アクティブ・ラーニング」形式の講義を行いました。その内訳は、①自宅研修としての個人課題の「私が描くハンドボール指導構想」の発表とその発表に対する質疑応答に8時間、②もう一つの個人課題「仲間と描くコーチング実習案」をもとにしたディスカッション及びワールドカフェを経たグループによるコーチング実習案作成に8時間＋α（時間外）、③コーチング実習の実施と他グループの評価に4時間、④ゲーム分析スキル実習におけるグループディスカッション及び発表に1時間です。

6. 審判委員会とのコラボレーションによるパネルディスカッションの実施

講習会2日目の午後に審判委員会と合同で「ステップ及びハードプレーとラフプレーの見極め」というテーマで、パネルディスカッションを行いました。ハンガリー出身の国際審判員アティラ・ヘイム氏に、日本とヨーロッパのレフェリングの違いを含めて講演していただきました。全国大会を担当する審判員と講習会受講者合わせて200名以上の方が一堂に会することにより、審判員とコーチがともに日本のハンドボールのこれからを考えていく良い機会となりました。受講者からは、もう少し審判の方とディスカッションする時間が欲しかったとの声がありました。

7. 講習会総括と指導者養成の今後の展望

今回の講習会では、期間の短縮、受講生の増加ということで、クオリティーの低下について若干の心配がありましたが、受講者の積極的な参加により、受講者がお互いに刺激を受けながら、自分のコーチングを見直してもらうという狙いを概ね達成できたと感じております。特にコーチング実習については、例年22時間＋αかけている準備を今年は8時間＋αで行いましたが、熱意、内容、運営ともに非常にクオリティーの高い指導が行われ、デモンストレーターの選手にも刺激になるトレーニングとなりました。

講義内容を精査した結果、速攻の戦術、現代のトレーニングの組み立て方などの講義に時間が取れませんでした。また、体力・フィジカルトレーニング、個人技能についても時間が十分ではありませんでした。

2016年度 日体協公認コーチ養成講習会 受講者

No.	氏名	所属	推薦団体
1	小松　真理子	㈱北國銀行	JHL
2	山本　沙貴	日本体育大学	全日本学連
3	生川　岳人	日本体育大学	全日本学連
4	富田　恭介	中部大学	東海学連
5	吉村　顕孝	岐阜大学　大学院	東海学連
6	田中　良	日本体育大学　大学院	指導委員会
7	小倉　慶輔	藤代紫水高等学校	茨城県
8	会田　亮祐	八千代高等学校	茨城県
9	村田　紀子	大平南中学校	栃木県
10	田保橋　光樹	東陽	栃木県
11	仲江川　久美子	鹿沼商工高等学校	栃木県
12	玉屋　裕基	八千代高等学校	千葉県
13	羽角　健二	大宮高等学校	埼玉県
14	久野　葵	埼玉栄高等学校	埼玉県
15	田村　貴司	浦和実業学園高等学校	埼玉県
16	加藤　良典	明治大学	東京都
17	國分　成真	桐蔭横浜大学	神奈川県
18	岩元　大樹	海上自衛隊	神奈川県
19	田邉　謙吾	海上自衛隊	神奈川県
20	山﨑　博樹	神奈川工業高等学校	神奈川県
21	松永　康宏	高津高等学校	神奈川県
22	長村　昇	高津高等学校	神奈川県
23	小林　聖	横浜創学館高等学校	神奈川県
24	中村　勝彦	生田高等学校	神奈川県
25	阿部　直人	法政大学第二高等学校	神奈川県
26	長野　大	高岡向陵高等学校	富山県
27	若林　久人	板城高等学校	長野県
28	西脇　孝雄	緑高等学校	愛知県
29	川口　健太郎	中川商業高等学校	愛知県
30	瀧本　銀河	瀬戸高等学校	愛知県
31	原田　恵	大同大学大同高等学校	愛知県
32	山川　由加	飛騨高山ブラックブルズ	岐阜県
33	宮崎　智之	紀北農芸高等学校	和歌山県
34	大串　有高	粉河高等学校	和歌山県
35	木下　豪人	打田中学校	和歌山県
36	杉山　裕一	湧永製薬	広島県
37	大前　典子	広島メイプルレッズ	広島県
38	前田　誠一	環太平洋大学	岡山県
39	田代　智紀	九州共立大学	福岡県
40	清永　真宏	西南学院大学	福岡県
41	積　孝也	明光学園高等学校	福岡県
42	山田　千尋	ソニーブルーサクヤジュニア	鹿児島県
43	石立　真悠子	Szekesfehervar KC	強化委員会
44	下拂　翔	筑波大学　大学院	指導委員会

ただ、こうした内容については、コーチセミナーやトップコーチセミナーを定期的に開催し、随時有資格者に情報提供するとともに、研修･研鑽の場を設定して行こうと思います。これは、指導委員会のビジョンである「指導者が学び、研鑽し続けることができる指導者養成システム（CTS: Coach Training System）の構築」の一環です。そして、公認コーチ、上級コーチの資格を持った方々が、各都道府県における指導者養成講習会の講義者になっていっていただき、「全ての指導者へ学ぶ機会を保障する」システムを整えていくことが、指導委員会のミッションと考えております。そのために、今年度は各ブロック及び各都道府県における指導者講習会開催を活性化するための全国指導委員会（2017年2月）、来年度には指導内容を明確にした「指導教本」の発行を予定しております。

人を指導することにより成長し、自分の人生を豊かにできる指導者が日本に溢れ、ハンドボールの未来が少しずつ開けていくことを指導委員会のポリシーとしております。そのための指導委員会の活動について、今後とも皆様のご理解とご協力のほどよろしくお願いいたします。

スコアルーム①

第36回全国クラブ選手権西地区大会

開催期日：2016年7月9日（土）～7月10日（日）
会　　場：大分市・コンパルホール体育室ほか

【男　子】

▼予選Aブロック

宮崎フェニックス 27（16－11、11－12）23 HC熊本
宮崎フェニックス 30（15－9、15－9）18 境港クラブ
HC熊本 38（18－9、20－10）19 境港クラブ

▼予選Bブロック

HC大分 33（15－13、18－10）23 徳島クラブ
HC大分 31（17－12、14－12）24 セキュリティ
徳島クラブ 23（9－14、14－7）21 セキュリティ

▼予選Cブロック

フレッサ福岡 26（13－7、13－7）14 下関クラブ
フレッサ福岡 22（11－12、11－8）20 中央クラブ
下関クラブ 20（7－10、13－6）16 中央クラブ

▼予選Dブロック

あらかき歯科 25（14－11、11－11）22 熊本教員クラブ
あらかき歯科 25（12－7、13－10）17 HC七隈
熊本教員クラブ 26（13－14、13－9）23 HC七隈

▼9、11位決定戦

セキュリティ 33（15－13、18－14）27 境港クラブ
中央クラブ 19（10－8、9－9）17 HC七隈

▼5、8位決定戦

HC熊本 25（15－9、10－14）23 徳島クラブ
熊本教員クラブ 25（10－7、15－14）21 下関クラブ

▼準決勝

宮崎フェニックス 28（18－7、10－12）19 HC大分
フレッサ福岡 20（8－12、12－3）15 あらかき歯科

▼決　勝

フレッサ福岡 26（17－12、9－11）23 宮崎フェニックス

【女　子】

▼予選Eブロック

コスモスピッキーズ 18（11－9、7－4）13 HC長崎
コスモスピッキーズ 26（14－7、12－4）11 神崎クラブ
HC長崎 25（12－8、13－10）18 神崎クラブ

▼予選Fブロック

徳山クラブ 27（14－6、13－10）16 NHC
徳山クラブ 23（14－4、9－4）8 Gluck
NHC 20（9－4、11－10）14 Gluck

▼予選Gブロック

レキオクラブ 29（11－6、18－8）14 徳島クラブ
レキオクラブ 33（17－5、16－11）16 LILAC
徳島クラブ 21（12－6、9－9）15 LILAC

▼予選Hブロック

香川レディース 16（10－7、6－8）15 シーコルズ
香川レディース 22（10－9、12－5）14 FCC
シーコルズ 31（13－11、18－7）18 FCC

▼9、11位決定戦

神崎クラブ 20（8－7、12－4）11 Gluck
FCC 18（8－6、10－7）13 LILAC

▼5、7位決定戦

NHC 19（10－6、9－9）15 HC長崎
シーコルズ 23（11－8、12－13）21 徳島クラブ

▼準決勝

コスモスピッキーズ 16（10－6、6－8）14 徳山クラブ
レキオクラブ 19（8－5、11－6）11 香川レディース

▼決　勝

コスモスピッキーズ 17（6－4、11－8）12 レキオクラブ

スコアルーム②

第36回全国クラブ選手権大会中地区大会

開催期日：2016年7月9日（土）～7月10日（日）
会　　場：加古川市・加古川市立総合体育館ほか

【男　子】

▼1回戦

高山ハンドボールクラブ 26（7－9、19－11）20 LALLAPALLOOZA
HC奈良 23（7－9、16－8）17 HC侍
HC同志社 31（16－9、15－15）24 清商クラブ
TMC 25（11－12、14－12）24 金津クラブ
FSV TOKAI 31（13－11、18－13）24 八光自動車工業（株）
FALCOM 42（21－8、21－9）17 Nagano Yeti
HC新潟 21（8－7、10－11、3－1）19 ヴィアティンMHC
HC alonza 28（14－7、14－13）20 908クラブ

▼交流戦

LALLAPALLOOZA 21（9－6、12－11）17 HC侍
清商クラブ 21（9－6、12－11）17 金津クラブ
八光自動車工業（株） 32（15－8、17－7）15 Nagano Yeti
八光自動車工業（株） 22（13－3、9－9）12 ヴィアティンMHC

▼2回戦

高山ハンドボールクラブ 38（17－13、21－6）19 HC奈良
HC同志社 45（22－10、23－14）24 TMC

FSV TOKAI 30（13－6、17－11）17 FALCOM
HC新潟 32（20－8、12－14）22 HC alonza

▼準決勝

HC同志社 29（12－14、17－13）27 高山ハンドボールクラブ
FSV TOKAI 27（14－13、13－11）24 HC新潟

▼3位決定戦

高山ハンドボールクラブ 30（18－12、12－16）28 HC新潟

▼決　勝

HC同志社 32（16－7、16－21）28 FSV TOKAI

【女　子】

▼1回戦

凮見鶏クラブ 40（23－1、17－7）8 遊気クラブ
大阪教員 17（10－6、7－9）15 J. J. GANG
Cheeky 12（棄　権）0 ナデシコクラブ
小松クラブ女子 20（10－10、10－7）17 R・Y・O
H. C. 富山 23（12－7、11－6）13 NTF立命館守山

▼交流戦

J. J. GANG 38（20－3、18－3）6 遊気クラブ
R・Y・O 21（11－6、10－1）7 NTF立命館守山
Cheeky 19（9－6、10－8）14 凮見鶏クラブ
H. C. 富山 16（10－8、6－5）13 高山クラブ

▼2回戦

いろは 19（10－11、9－4）15 凮見鶏クラブ
大阪教員 17（8－7、9－9）16 Cheeky
小松クラブ女子 25（12－11、13－6）17 高山クラブ
三重娘 27（16－11、11－14）25 H. C. 富山

▼準決勝

いろは 19（8－11、11－4）15 大阪教員
小松クラブ女子 22（7－8、11－10、4－2）20 三重娘

▼3位決定戦

大阪教員 25（13－11、12－8）19 三重娘

▼決　勝

いろは 22（8－7、14－14）21 小松クラブ女子

スコアールーム③

第36回全国クラブ選手権大会東地区大会

開催期日：2016年7月9日（土）～7月10日（日）
会　場：函館市・函館アリーナほか

【男　子】

▼予選Aブロック

甲府クラブ 30（17－10、13－14）24 青商クラブ
甲府クラブ 41（16－14、25－9）23 土浦三高クラブ
青商クラブ 25（14－10、11－11）21 土浦三高クラブ

▼予選Bブロック

渡辺組 31（15－15、16－13）28 湖陵クラブ
渡辺組 29（16－14、13－12）26 信夫クラブ
湖陵クラブ 36（22－13、14－20）33 信夫クラブ

▼予選Cブロック

上送 23（10－8、13－11）19 函工クラブ
上送 29（18－13、11－12）25 松葉送球会
函工クラブ 23（10－8、13－11）19 松葉送球会

▼予選Dブロック

東陽 23（8－12、15－11）23 FST
東陽 29（16－11、13－8）19 HC秋田
FST 30（15－10、15－18）28 HC秋田

▼準決勝

甲府クラブ 30（17－12、13－13）25 渡辺組
東陽 30（13－10、9－12、3－3、5－0）25 上送

▼3位決定戦

渡辺組 26（17－9、9－14）23 上送

▼決　勝

甲府クラブ 37（15－6、22－12）18 東陽

【女　子】

▼あブロック

オレンジクラブ 31（15－13、16－11）24 HC秋田w
オレンジクラブ 35（19－7、16－10）17 日川クラブL
HC秋田w 31（19－13、12－12）25 日川クラブL

▼いブロック

SAKURAクラブ 16（8－6、8－9）15 北海道倶楽部
SAKURAクラブ 14（8－6、6－8）14 REDS
北海道倶楽部 20（10－13、10－6）19 REDS

▼うブロック

宮城ケヤッキーズ 24（17－10、7－12）22 サンライズハンド
宮城ケヤッキーズ 21（12－7、9－7）14 梅の家
サンライズハンド 36（18－16、18－15）31 梅の家

▼決勝リーグ

宮城ケヤッキーズ 24（14－11、10－10）21 オレンジクラブ
宮城ケヤッキーズ 22（11－5、11－10）15 SAKURAクラブ
オレンジクラブ 24（16－7、8－4）11 SAKURAクラブ

優勝：宮城ケヤッキーズ　準優勝：オレンジクラブ　3位：SAKURAクラブ

がんばれハンドボール20万人会「サポート会員」6・7月入会・継続会員

【青森】田辺貴美子【福島】大室柊人、武藤奏多、大内　駿、佐久間海人、星　伊吹、平野悠真、山田悠太、根本悠雅、伊藤詩太、半沢瞳人、菅野玲央、松木惇星【群馬】酒井　宏【埼玉】齋藤和也、佐藤秀明、佐藤三枝子【千葉】康本拓史【東京】増田美穂子、塩川安賢、岡本康男、河原畑隆義、安藤純光、大津武彦、小笠原泰代【神奈川】河野卓也、吉澤和美、木本一成、岡島達也、岡島典子、稲葉鋭夫【山梨】齊藤　實【愛知】井上和子、安藤　孝、山田壮八、竹内佐織、持田公一郎、黒部泰弘【三重】岡田　望【岐阜】笹本育男【大阪】里村静俊【和歌山】加藤照男【愛媛】森實岳史【福岡】日野祐一郎【沖縄】崎田尚孝

【9月の行事予定】

【会議】

9月11日(日)　常務理事会

【大会】

9月10日(土)～
第41回日本リーグ ……………………………（日本各地）

9月19日(日)～24日(土)
日韓スポーツ交流（派遣・男子）…………………（韓国）

9月24日(土)～10月3日(月)
第5回アジアビーチゲームズ………（ベトナム・ダナン）

HAND BALL CONTENTS Aug. Sep.

次号10月号（No.562）は10月1日発行予定です。

国際ハンドボール連盟公式試合球

IHF OFFICIAL GAME BALL



［3号球］品番 **H3X5001-BW ¥8,400（本体価格）＋消費税**
［2号球］品番 **H2X5001-BW ¥8,200（本体価格）＋消費税**
国際公認球 検定球 人工皮革 縫い ブルー×ホワイト ラテックスチューブ

www.molten.co.jp









代表取締役　青木 理恵

販売から賃貸管理までトータルサポート

私たち株式会社ユリカコーポレーションは、お客様方へ不動産を用いたライフプランをご提案しております。
自社ブランドである『YURIKA ROSE』(ユリカ ロゼ)シリーズとは別に、社有物件『ユリカビル』が完成！
これも、日ごろから皆様方のお力添えがあってこそです。
今後も邁進してまいりますので、どうぞよろしくお願い致します。

私達、株式会社ユリカコーポレーションは女子ハンドボールを応援しています!!

http://yurika-co.jp/

株式会社ユリカコーポレーション

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2-6-2 神田セントラルプラザ1202
TEL：03-3525-8986 / FAX：03-5295-8188



(公財)日本ハンドボール協会編『ハンドボール』第五六一号
平成二十八年八月二十六日印刷
平成二十八年九月一日発行
東京都渋谷区神南一－一－一
電話　代表〇三－三四八一－二三六一
振替　〇〇一二〇－七－一〇二九三
編集兼発行人　蒲生晴明
定価　年間三三〇〇円